

# 訪日・滞日イギリス人のカルチャーショック

原 田 俊 明

## はじめに——カルチャーショックとは

カルチャーショックとは、単純に定義すれば、「新奇でなじみの薄い文化的環境に晒されることから起こる心理的な帰結 (the psychological consequences of exposure to novel and unfamiliar cultural environments)<sup>1</sup>」となろう。日英間のような「遠い (distant)」とされる文化ほどカルチャーショックの起こる度合いや深刻さは高いものと思われる。例えばエドワード・ダンバー (Edward Dunbar) が例示した在米ドイツ人の会社役員 21 名と、在日アメリカ人の会社役員 21 名との比較がある。在米ドイツ人のほうが自己の職業生活に対する満足度が高く、仕事上の問題も少ないとの由である<sup>2</sup>。

以下、イギリス人が訪日時あるいは滞日時に体験した個々の事例を列挙する。主な情報提供者 (main informants) として A 教授<sup>3</sup>と B 夫妻<sup>4</sup>の 3 名から直接聞いた話や、筆者も一緒に体験した出来事を中心に、箇条書きする。主に 1990 年代後半から今世紀初頭にかけて集めた情報なので、事例としては少々古びてしまったものもあるが、いずれも日英文化の接触や交流や摩擦や衝突について一面の真実を伝えているものと確信している。注釈には過去から現在にわたって来日したイギリス人ら<sup>5</sup>の反応も付け加えておく。

## 1. 交通機関や交通マナーに関すること

事例 1) ロンドン・ヒースロウ空港から成田国際空港へ向かう飛行機も、またその逆も、乗客はなぜか日本人ばかりだ。日本航空 (JAL) や全日空 (ANA) ならともかく、British Airways (BA) や Virgin Atlantic でも同様だ<sup>6</sup>。

事例 2) 成田空港に着いてみたら、エスカレーターがピカピカできれいな割に、まるで故障でもしているかのようにスピードが遅いので驚いた。

事例 3) 東京のエスカレーターでは急ぐ人が右側を歩く。のんびり行きたい人は左側に一列で立っている。ロンドンとは正反対だが、私はむしろ東京の作法が正しいと思う。ロンドンこそ東京を見習うべきだ。なぜなら高速道路 (motorway) を見れば分かる。日英のような左側通行の国では遅い車は左を走行し、急ぐ車は対向車線に一番近い右を行く。この原則で考えればロンドンが間違っている。嘆かわしいことに、ロンドンの人々はいつの間にか右側通行の大陸諸国を真似るようになってしまった。しかし大阪に行ってみたらロンドン流の間違った作法を踏襲しているのを見て驚いた。

事例 4) 日本の極端に遅いエスカレーターを私が急いで歩いていると、先頭を歩いていた筈の人がゴール前で突然立ち止まり、その結果、乗降客で渋滞してしまうことがある。なぜ一部の日本人は後続の人の迷惑も顧みずゴール前で立ち止まるのか。

- 事例 5) 日本人はエスカレーターではのんびりしているのに、エレベーターに乗ると急にせかせかして「閉」ボタンを押すのはなぜだ<sup>7</sup>。
- 事例 6) 日本では信号機が切り替わるまでの時間が極端に長い。ひとたび赤信号になると延々と待たされる<sup>8</sup>。なぜ欧米諸国のようなもっと早く切り替わるシステムを導入しないのか。
- 事例 7) イギリスでは信号機は歩行者に隷属している。したがって赤信号でも歩行者の自己責任において渡って良いのである。しかし日本では歩行者が信号機の奴隷に成り下がっている。車の通る気配が全然ないのに、ただ突っ立って青信号を待っている日本人に主体性は感じられない。
- 事例 8) 日本人歩行者は信号を頑なに守る反面、信号機が設置されていない所では危険を顧みずに平気で危険な横断をしている。この落差 (gap) は何だろう。イギリスではありえない極端さだ。どうやら日本人は「信号」という一種の記号に従っているだけで、本当の意味で交通安全を考えてはいないようだ。
- 事例 9) 歩行者用信号が青になるとエロティックなスコットランド民謡 “Comin’ Thro’ the Rye” (邦題「故郷の空」) のメロディーが流れてきた<sup>9</sup>。なぜ信号機からエロい曲が聞こえて来るのか。盲人用信号だって？ イギリスにはそんな物は存在しない。
- 事例 10) 日本では車の運転マナーは概して良いが、ベンツなどの高級車が傲慢で道を譲らない点は、“Noblesse oblige” (ノブレス・オブリージュ: 高貴な者が責務を負う) の考え方のあるイギリスとは正反対だ。日本の富裕層は「周りの車がどいてくれるから」という理由でベンツ (Mercedes) に代表されるようなガタイの大きな高級車を購入するらしいが、イギリスでは考えられない。イギリスでは高級車のマナーのほうが紳士的で、周囲への気配りがあるものだ。
- 事例 11) 日本では車のマナーはイギリスより若干劣るが、他の国と比べれば良いほうだ。しかし日本人の自転車マナーは最悪だ。自転車が歩道を走っているのが歩行者にとって大変危険だ。呆れたことに警察官までもが自転車で歩道を走行している。また、サイクリストが歩行者に対して、「どけ!」とばかりにベルをチリンチリン鳴らすのは本当に頭にくる<sup>10</sup>。歩道を猛スピードで走行するばかりか、車道や歩道を逆走だの、片手で雨傘を差しながら、携帯電話で通話しながら、或いは携帯メールを打ちながら運転したり、自分の前と後ろに子供を一人ずつ乗せて運転するつわもの主婦もいる。日本の道は恐ろしい。
- 事例 12) 日本では車の横暴 (路上駐車など) のため自転車が歩道を走っていると見たが、一番割を食っているのが歩行者だ。イギリスでは正反対で、歩行者が一番堂々としていて、自転車は歩行者に遠慮し、車は自転車と歩行者に遠慮するものだ。これも “Noblesse oblige” というものだ。
- 事例 13) 日本ではよそ見をしながら歩いたり、自転車の脇見運転をする人が多いので危険だ。興味を抱いた対象物については、きちんと立ち止まって見る習慣をつけるべきだ。
- 事例 14) 歩行者 (特に女性) の歩行が極端にのろい。無駄に腕を斜め下で大振りしながら歩いている人が多い。追い抜こうとして腕にぶつかるものなら、逆ギレする女もいる。大変迷惑だ。振袖を着ていた先祖の遺伝子のせいだろうか。
- 事例 15) 日本人は他人とぶつかっても決して謝らない。最初はなんと無礼で野蛮な、と思ったが、今ではすっかり慣れてしまった。東京のような人口過密な都市ではお互い様である。私も今では平気で人にぶつかり、全く謝罪しないようになった。しかしこの調子でイギリスに帰ったら、必ずや「野蛮人」と見なされ軽蔑されるだろう。あまりにも日本に慣れてしまうのも考えものだ。

- 事例 16) 日本の鉄道がほぼ時刻表通りに動いていることに驚嘆した。イギリスでは到底無理だ。
- 事例 17) 日本の駅の自動改札では切符の取り忘れが後を絶たない<sup>11</sup>。危うく前の乗客の切符をつかまされる羽目になった。これはそもそも設計ミスだ。ロンドン地下鉄を見習って欲しい。
- 事例 18) 日本の電車で端の座席に座っていると、ドアの脇で立っている乗客が寄りかかってくるので不快だ。これはそもそも設計ミスだ。透明なアクリル板をうまく配したロンドン地下鉄を見習って欲しい。
- 事例 19) 通勤電車でぐったり熟睡している日本人をよく見かけるが、彼らは違法薬物でもやっているのか。そうでなければ公共の場であんな醜悪な姿を晒す筈はない。
- 事例 20) 東京の電車内で熟睡している日本女性をよく見かけるが、顔が髪の毛で隠れ、こっくりこっくり (nod in a doze) する姿が印象的だ。外で大雨が降っている時など、若い頃に見た黒澤映画『羅生門』(1950)<sup>12</sup> の一場面を思い出さずにはいられない。ロンドン地下鉄などでは決して見ることでできない藝術的情景だ。
- 事例 21) 一部の日本女性はなぜ電車の中など公衆の面前で平然と化粧できるのだろう。娼婦のように恥ずかしいと思わないのだろうか<sup>13</sup>。
- 事例 22) 日本の電車に乗っていると、2種類の極端な日本人が居ることに気づく。1種類目は白人の隣の席を絶対に避けるタイプだ。東京ではこの種の白人恐怖症の乗客は減りつつある。もう1種類は、喜んで白人の隣に座り、これ見よがしに英字新聞を広げるタイプだ。男性に多いが、白人に話しかけられるのを待っているようだ。アメリカ人なら話しかけるかも知れないが、イギリス人は冷淡であり、そのような人間と関わりを持ちたくない<sup>14</sup>。
- 事例 23) 日本の列車では車掌が客車を巡回し、乗り越した乗客の運賃を精算してくれるが、その際、手数料を一銭も徴収しないのが解せない。イギリスやその他のヨーロッパ諸国では、車掌に余計 (extra) な仕事をさせた人件費として高額の上乗せ金 (surcharge) を支払うのだが<sup>15</sup>。
- 事例 24) 東京近辺のラッシュ時の通勤電車は人間の使う乗り物とは思えない。あのような劣悪な環境でも暴動が起きないのが不思議だ<sup>16</sup>。
- 事例 25) 日本の首都圏では電車がほんの1~2分遅れただけで乗客がプラットフォームに溢れ出す。そしていよいよ電車が来ると、ただでさえ込んでいる電車がギュウギュウ詰めになる様子は恐怖そのものだ。
- 事例 26) 日本の会社は正社員・派遣社員・アルバイトを問わず、従業員に交通費を支給してくれるのが嬉しい。しかも交通費の分は収入とは見なされないで所得税の対象外である。交通費は自己負担が当たり前のイギリスでは考えられないような美味しい習慣 (cushy custom) だ。しかし日本のやり方は一見良さそうだが、電車の混雑の一因にもなっているのではないか。
- 事例 27) 日本の駅や電車や店舗では、床が滑りやすい材質でできていることが多い。私も何度か転んだことがある。イギリスだったら、とっくに裁判沙汰だ。「日本＝ハイテク」のイメージで来日したが、意外なところで遅れている。
- 事例 28) 東京首都圏の街は、(埼玉県川越市など) 一部の例外を除いて、鉄道の駅を中心にして成り立っている。なんと歴史の浅い薄っぺらな国なのか<sup>17</sup>。

## 2. 日本人の言動に関すること

- 事例 29) 駅のプラットフォームなどに平気で痰や唾を吐く男が多く不愉快だ<sup>18</sup>。
- 事例 30) 金曜の晩などにプラットフォームに嘔吐する人（特にサラリーマン）が多く不愉快だ。
- 事例 31) 駅のプラットフォームや電車の中でしゃがんでいる若者を見かけるが、彼らの頭は狂っているのか。公衆の面前で排便を思わせる格好をするなんて理解に苦しむ<sup>19</sup>。見ていて不快だ。
- 事例 32) 一部の日本人はなぜせっかくの黒髪を自ら台無しにして排泄物や吐瀉物のような色彩の頭にしてしまうのか。
- 事例 33) 日本の自動ドアの普及率には目を見張る。さすがはハイテクの国だ<sup>20</sup>。しかし自動ドアではないコンビニの扉で危うく怪我をしそうになったことがある。知人のためにドアを押さえていた日本人が、他人である私の前で突然ドアから手を離れたからだ。
- 事例 34) 日本人は自分の知り合いには優しいそぶりを見せるが、他人には非常に冷たい<sup>21</sup>。この落差 (gap) はなんだろう<sup>22</sup>。
- 事例 35) 日本では横断歩道や駅のプラットフォームで盲人の手を引く人がいない。それどころか皆、盲人を避けて歩いているように見受けられる。日本人は他人、特に身障者には冷たい<sup>23</sup>。
- 事例 36) 初対面の日本人がよく年齢を訊いてくるが、なぜだろう。私はそんなに幼く見えるのか。あとで分かったことだが、日本人は年齢でもって相手との距離を測り、上下関係を決めるらしい。イギリスの階級に似ているのだろうか。しかしイギリス人は相手の階級を直接質問するのは無礼だと考えるので、階級方言を手がかりに自分で推理する。日本人の直接行動は無礼だ<sup>24</sup>。
- 事例 37) 初対面の日本人がよく血液型を訊いてくるが、なぜだろう。吸血鬼のようで不気味だ。私は大怪我も大病も経験したことがないので、自分の血液型は知らない。あとで分かったことだが、日本人は血液型で性格を分類しているとのことだ。イギリスでは聞いたことのない奇妙な迷信だ。「日本＝ハイテク」というイメージだったが、実際には似非科学 (pseudo science) を簡単に信じてしまう科学音痴の人々、それが日本人の正体だ。
- 事例 38) 日本人は初対面の白人に向かって“Can you use chopsticks?” (お箸を使えますか?) と無礼千万な質問を浴びせてくる。私はすかさず“Can you use a knife and fork?” (ナイフとフォークを使えますか?) と訊き返すことにしている。しかし近年ではこのような無礼な日本人は減りつつある。
- 事例 39) 日本人は「芸能人の誰々に似ている」と言われて喜ぶが、個人主義の発達したイギリスでは考えられない。
- 事例 40) 日本人は入社年度や入学年度がたった1年違うだけで、一方が「先輩でござい」と威張り腐って、他方が「後輩です」とばかりにペコペコ諂<sup>へつら</sup>っている。いやなカースト制度だ。一方、“Noblesse oblige” (ノブレス・オブリージュ: 高貴な者が責務を負う) の考え方のあるイギリスでは、上の者が下に優しく接するものだ。日英は正反対だ。もし私が日本人として生まれていたら、人間関係のストレスに耐えかねて気が狂っていただろう。しかし私はいつも外人 (gaijin; foreigner) で居られるので気が楽だ。そのためには日本語なんか覚えられない方がいい。
- 事例 41) 日本には集団ごとに校歌だの社歌だのがあって大変だ。高校を卒業して大学に入れば、新しい歌 (校歌) を覚えさせられて、会社に入ればまた新しい歌 (社歌) を吹き込まれる。狭い



- 集団での一致団結には有効かも知れないが、国民で<sup>いちがん</sup>一丸になるには却ってマイナスだと思う<sup>25</sup>。
- 事例 42) 集合写真やスナップ写真を撮る際にピースサイン（英語では V-sign）やら、また、最悪の場合、逆ピースサイン（inverted V-sign）をするような下品な人が多い。彼らは喧嘩を売っているのか<sup>26</sup>。
- 事例 43) 日本人は旅先で土産物をたくさん購入して、後で知人に配って廻るらしいが、なぜ旅先でわざわざ時間と金と労力を浪費するのだろう。
- 事例 44) 日本人は茶道や華道など自国の美しい伝統文化を外国人に自慢するが、それらを本当に実践している人が少ないのはなぜだ。
- 事例 45) 日本の俳句 (haiku) という詩歌 (poetry) は、いちいち注釈をつけないと本質を理解できない奇妙な極小藝術 (minimal art) だ。アメリカなどにも愛好家が居ようだが、私には季語 (a seasonal word) が入っただけの安っぽい広告メッセージ (和製英語でキャッチコピー) のように感じられる<sup>27</sup>。
- 事例 46) 日本人から将棋を習った。当初の予想通り、西洋のチェスと基本的な考えは同じであり、自分の持ち駒を使っていかに敵の王を詰ませる (checkmate にする) かに主眼を置いた戦略ゲームだ。しかし大きな違いもある。日本では女性の活躍を好ましく思わないので、Queen という駒がなく、代わりに飛車 (Flying Vehicle) が活躍する。個々の駒の動きがチェスに比べて限定的な点が、西洋人にはもどかしい。あまり行動しないところが日本的かも知れない。将棋とチェスで同一の動きをするのは、王将=King と飛車=Rook と角行=Bishop だけである。最大の違いは、将棋には再利用の思想があり、捕獲した敵を味方の落下傘 (parachute) 部隊として投入できる点だ。この落下傘の思想は 20 世紀の近代戦を先取りしているようで大変興味深い。しかし味方をすぐに裏切って敵に<sup>なび</sup>靡いてしまうのは<sup>28</sup>、日本的な行動規範 (code of conduct) なのだろうか。気になるところである。
- 事例 47) 日本のサッカーファンは驚くほど礼儀正しい。暴力沙汰は起こさない。ゴミを散らかすこともない。イギリスでは考えられない。
- 事例 48) サッカー (イギリス英語で football) のイングランド・サポーターはヨーロッパ中どこへ行っても嫌われ者だが、日本へ来たら大歓迎を受けた。最初は当惑したが、応援してくれるのは何だか嬉しい。
- 事例 49) 日本では、特に男性の場合、親しい友達同士でも下の名前 (first name) では呼び合わず、苗字 (surname) でお互い呼び合っていると聞いて驚いた。まるでイギリスの上流階級の男性のようだ。
- 事例 50) パチンコという娯楽が大人気なのが不思議だ。あまり気乗りしない日本の友人を誘って行ってみたが、あっという間に 3 千円が無駄になった。あんなタバコで煙たくて騒々しい場所がどうして流行するのか理解に苦しむ。
- 事例 51) 日本では被差別部落の人々 (burakumin) が就職や結婚の際にいまだに差別されていると聞いたが、信じられない。日本は真の近代国家ではなく、インドのようなカースト社会がいまだに存在しているのだろうか。
- 事例 52) 日本の労働者階級の男性は独特の雰囲気を漂わせているので、一目でその階級が分かる。しかし日本人はアメリカ人同様に naïve なので、国内に階級が存在することを認めたがらない。

大きな見出しの文字が紙面に躍り、これまた大きなカラー写真の入った「スポーツ新聞」という名のエロ新聞を広げている男性はほぼ間違いなく労働者階級だ。また、極めつけは、耳に鉛筆を挟んで、数字がぎっしり印刷された競馬新聞に赤鉛筆で熱心に印をつけている男性だ。彼らは総じて背が低く、痩せていて、しわがれた声を出す。先祖代々栄養価の高い食品とは無縁だったのだろう。海外とはおそらく一生縁がなさそうである。それというのも海外でこのような日本人を目にすることがないからだ。一方、イギリスの労働者階級は背が低く、ずんぐりむっくりしたイメージがある。彼らは今では挙って海外旅行に出かけるので、海外の旅先（特にヨーロッパ南部）で彼らを目にすることが多い。

事例 53) 日本では毎年交通事故死者の 5 倍もの人（3 万人超）が自殺していると日本の英字新聞で読んだ。私ももし日本人として生まれていたら、今頃は人生に悲観して自殺していただろう。また、もしアメリカ人に生まれていたら学校かショッピングセンター辺りで銃を乱射していたかも知れない。イギリス人に生まれて本当に良かった<sup>29</sup>。

事例 54) 日本では夏の強い日差しの中でもサングラス（sunglasses）をかけている人が限りなく皆無に近いのが不思議だったが、やはり目の色が白人と違って黒いからということで納得した。日本人の目は天然サングラス状態なのだ。

事例 55) 来日して気づいたのだが、「日英は似ている」と妄想している日本人が非常に多い。しかしイギリス人でそのように考える人は限りなく皆無に近い<sup>30</sup>。この落差（gap）は何だろう。

事例 56) イギリスには日本研究家（Japanologists）や日本鼯員（Japanophiles）がほとんど居ないのに、日本には英文学者（English literary scholars）や英国鼯員（Anglophiles）が多いのはなぜだろう。

事例 57) イギリス人はアメリカ人などから“Brit”（複数形は Brits）と呼ばれて軽蔑されても平然としているのに、“Jap”（複数形は Japs）と呼ばれて日本人がムキになるのはなぜだ。

事例 58) 日本人はなぜ外国人による日本批判を有り難がるのだろうか。イギリスでは考えられない。イギリス人は良くも悪くも他国からの批判を意に介さない。

### 3. 日本の自然に関すること

事例 59) 地震、台風、火山の噴火など日本の荒々しい自然災害には目を見張る。それに雨季（梅雨のこと）や集中豪雨や暑苦しい夏や毒蛇や、毒がなくても恐ろしい蛇や、東京首都圏の冬のカラッ風や日本海側の豪雪も恐ろしい。これに比べれば、イギリスの自然のなんと御しやすいことか。

事例 60) 東京から至近距離の所に高尾山という大自然が残っているのは素晴らしい。一步足を踏み外せば命を落とすような恐ろしい山だ。東京近辺の小学生が遠足であんな怖い所を訪れるなんて信じられない。

事例 61) 日本の 6 月を彩る紫陽花（アジサイ; hydrangea）は青みがかっていて実に美しい。イギリスの hydrangea は夏の間中咲いているが、くすんだピンク色で、日本のものと比べるとあまり美しくない<sup>31</sup>。

事例 62) 日本の夜空の月はなぜ汚らしい黄色なのか。大気汚染のせい<sup>32</sup>。

事例 63) 日本人は「自然を愛する」と口では言うが、口先とは裏腹に彼らは自然を憎んでいる印象

を受ける。首都圏の緑地の乏しさは異常だし、河川や海岸線の多くは護岸工事で無残なコンクリートの姿を晒している。商店街の街灯や電柱などで見かける安っぽくてケバケバしいプラスチック製の植物（春の桜や秋のもみじの類い）も何とかならないのか。富士山頂の自販機をテレビで見たが、便利さを追い求め過ぎて自然破壊にならないのか。それに何と言っても興が醒める。

#### 4. 日本の店に関すること

事例 64) 日本は物価高だと聞いていたが、実際には交通費も飲食費も宿泊費もロンドンよりずっと安いので驚いた<sup>33</sup>。

事例 65) 日本の店では店員が恭しく客に挨拶するが、客はそれには応じず無視している。この客と店員の上下関係は何だろう。

事例 66) 日本の商店は日曜日もやっていて、大変賑わっている様子に驚いた。しかし別の曜日が休みで、しかも店によって定休日がバラバラなのが混乱を招く。行ってみたら休みということがよくある<sup>34</sup>。

事例 67) 日本のコンビニは24時間照明器具がフル稼働しているが、資源の浪費ではないのか。それに眩し過ぎて不快である。しかし日本人の目は天然サングラス状態なので、あの眩しさでちょうど良いのだろうか。

事例 68) 日本では店が閉まるときにスコットランド民謡“Auld Lang Syne”（邦題「蛍の光」）のメロディーが流れるが、日本の店主はなぜあれほど感傷的（sentimental）なのか。

#### 5. 日本の街並に関すること

事例 69) 日本の住所・住居表示はブロック単位で成り立っているので、非常に分かりにくい（但し、京都市や札幌市は例外<sup>35</sup>）。欧米やアジア・アフリカ諸国のように、全ての通りに名前を付けて、番地と通り名（より日本式には通り名と番地の順）を公式の住所にする方が合理的ではないのか。

事例 70) 日本の住宅街や商店街に設置してあるブリキ製の手書きの地図は、まるで江戸時代の古地図のようで藝術的だが、残念ながら実用性は皆無に近いと思う。

事例 71) 日本では集合住宅や大きなビルにのみ名前をつけ（多くの場合、英語などの西欧語、それもしくはば間違った表記）、一般住宅に名前をつける人が居ないのはなぜだ。

事例 72) 先進国でありながら醜悪な電柱が剥き出しで、住宅街には歩道と車道の境界もない。犯罪が比較的少ないのは良いが、交通事故が心配だ。

事例 73) 先進国でありながら道路が継ぎ接ぎだらけだ。せっかくアスファルトで固めても、また数ヶ月か数年すると土木業者がやって来て部分的に掘り返す。見た目は醜いし、踏くこともあって危険ですらある。それに何よりも税金と資源の無駄遣いだ。

事例 74) 日本では築後30年も経っていない住宅をわざわざ解体して、その土地にまた新しい家を建てると聞いた。全く気が知れない。もっとしっかり建てれば良いものを。時間と金と資源の無駄だ。

事例 75) 日本の住宅の建築現場の前を毎日通りかかるが、マッチ棒のような頼りない材木を組み合わせただけの構造だ。あれですぐに壊れてしまう。あんな建物に大金を払う人の気が知れない。日本は世界有数の地震国でありながら石や煉瓦<sup>レンガ</sup>でしっかりと家を建てないのが不思議だ。

事例 76) 久し振りに日本を訪問してみたら、居候先の街並がすっかり変わっていた。イギリスでは（ロンドン東部の再開発地帯を除いて）考えられない。結果としてアメリカ以上に歴史の浅い薄っぺらな国に見えてしまう。

事例 77) 新築成った大型集合住宅（和製英語でマンション）が周囲の環境を圧迫している。住民の環境権が保障されたイギリスでは考えられない暴挙だ。日本では住民の権利より建築業者の利益が優先されている<sup>36</sup>。

事例 78) 日本では街中に自販機がたくさん設置されていて、しかもきちんと機能している。機能しているのは良いが、街の美観を損ね、電力を浪費しているのも事実だ。イギリスだったら暴力的な犯罪者（vandals）によってとくに破壊されているだろう。

事例 79) 日本では自販機から誰でも簡単に酒類やタバコが買えてしまうが、これでいいのか。

事例 80) 日本の銀行や郵便局の窓口が防弾ガラスで仕切られていないことに驚いた。治安が良いのは分かるが、それでも強盗事件は起きるものだ。日本も欧米並みに備えを万全にした方が良いのではないか<sup>37</sup>。

事例 81) 日本の病院に初めて行ったが、中に入るとすぐに銀行窓口があったので驚いた。しかしそれは勘違いだった。銀行ではなく病院の受付だと聞いてさらに驚いた<sup>38</sup>。

## 6. 日本のトイレに関すること

事例 82) 先進国でありながら公衆便所が極端に汚いのはなぜだ。東南アジアの方がずっとまともだ。

事例 83) 公衆便所にトイレットペーパーが設置されておらず、洗面台には石鹸すら置いてないのはなぜだ<sup>39</sup>。置いておくと何者かが持ち逃げするような国なのか。

事例 84) 和式便所の使い方が分からず（どちら向きにしゃがんで良いか分からず）右往左往してしまった。こんな穴を掘っただけの簡易トイレが先進国で使われていることが信じがたい<sup>40</sup>。

事例 85) 公衆便所とは逆に、デパートや一般家庭のトイレが無駄に超ハイテク（ウォッシュレットなど）なのが不思議だ<sup>41</sup>。日本は極端な国だ。

事例 86) デパートのトイレで困ってしまった。水を流そうにも水洗レバーがない。立ち上がったらず水が自動的に流れ出したので安心した<sup>42</sup>。

事例 87) 駅の公衆便所で困ってしまった。水を流そうにも水洗レバーがない。立ち上がれば水が出てくると期待したが、だめだった。壁に目をやったら、何やらハイテク・センサーのような赤い光が灯っていて、手のイラストが描いてあった。手を近づけたら勢い良く水が流れたので安心した。

事例 88) 日本の女子トイレは不思議だ。水洗用のハイテク機器が壁についているようなので、スイッチを押してみたが、水が流れるような電子音がするだけで、肝心の水が全然流れない。故障中だろうか。あとで分かったことだが、あの機械は「音姫」といって、下半身から出る音が個室の外に漏れ聞こえるのを防ぐ道具だそうだ。「音姫」がなかった頃は、無駄に水を流す女性が後を絶たなかったもので、節水のために開発されたとのこと。日本女性の自意識過剰ぶりには驚愕した<sup>43</sup>。

事例 89) 地下鉄の駅やコンビニにきちんとトイレ（しかも無料）が設置されているのは助かる。

事例 90) 日本では公共のトイレ掃除を異性の清掃員が行なっていることに驚いた。イギリスでは男



子トイレは男性作業員、女子トイレは女性作業員と決まっているので、考えられない奇習だ。  
青い作業服を着た小さなおばちゃんたちが男子トイレの中をちょこまか動く姿を見ると、ああ、  
日本に来たなぁと実感が湧く。

事例 91) 日本では駅や学校など（本学を含む）のトイレや、公園の公衆便所の出入口にドアがないのはなぜだ。イギリスでは日本とは逆に 2 重扉が普通だというのに。中に立って用を足している男性が、通行人に丸見えで大変不快だ<sup>44</sup>。

## 7. 飲食に関すること

事例 92) 日本の国税庁はビールに重税を課す一方で、なぜもっと危険性の高いタバコや蒸留酒（焼酎やウィスキー等）の税金を軽くするのか。日英で正反対の政策だ。

事例 93) 日本の居酒屋（英語でも *izakaya*）は飲み屋ではない。単なる食堂としか思えない。実につまらない店舗だ。

事例 94) 日本人はビールをほんの少し飲んだだけで、なぜあれほど真っ赤になって酔っ払うのか。まるで子供が無理して大人に成ろうとして飲んでいるようにすら見える<sup>45</sup>。

事例 95) 日本の宴席では飲食物を前にして退屈なスピーチが延々と続くが、彼らは我慢大会（endurance）をやっているのか<sup>46</sup>。

事例 96) 日本人の宴席に参加すると、いちいちビールのお酌に巡回する参加者（たいてい男性）が複数いる。他の参加者と談笑をしているのを遮って割り込んでくるし、まだ飲み切っていないグラスにつき足して、ビールの味を落とすので、この種の輩は邪魔である。飲みたくなったら自分で注ぐので、放っておいてもらいたい。だいたいにおいて、日本ではビール用のグラスが小さ過ぎる。日本人がアルコールに対する抵抗力がない（すぐ赤くなって酔っ払う）のと、この種のお節介な「お酌文化」のせいだろう<sup>47</sup>。

事例 97) 日本でビールを注文すると、しばしば冷凍庫で凍らせたグラスまたはジョッキに、これまたギンギンに冷やしたビールを注いで持って来る。日本人は冷え過ぎて味もそっけもないビールを供すことがサービスの一環だと思っているのか。だとすれば、とんだ勘違いの味覚音痴である<sup>48</sup>。

事例 98) 東京のフランス料理店で赤ワインを注文したら、まるでビールや白ワインのように摂氏 5 度ぐらいに冷えたのを持ってきた。なんと野蛮な（Savagery!）。もちろん突き返した。赤ワインは摂氏 16~18 度程度の物を供するのが欧米の常識である<sup>49</sup>。

事例 99) 日本の飲食店では黙っていても水とおしぼりを持って来てくれる。無料な上に、チップ（tip）をはずむ必要もない。しかし初来日ときは「こんなの注文してない!」と突き返してしまった。店員が困った顔をしていたのを覚えている<sup>50</sup>。

事例 100) 日本の飲食店では注文の品が揃ったところで、黙っていても伝票（the bill）を持って来てくれる。その後追加注文しても、計算し直した伝票をくれるので何の面倒もない。イギリスだったら追加注文の場合、余計な面倒を掛けた分、チップ（tip）をはずまなければならない。日本のやり方は合理的で素晴らしい。

事例 101) 飲食店で店員が飲食物をテーブルに持って来る際、黙って置いてから何か言えば良いものを、日本では置く動作と喋る動作を同時に行なうため、結果として店員が客の飲食物に間近

から唾を浴びせるので不快だ。

事例 102) 日本の都会や地方都市では深夜に空腹になった際、24 時間営業のマクドナルド (McDonald's) やガスト (Gusto) や松屋や吉野家に入店することで、信じられないほど安価で温かい食事を摂ることができる。一方、イギリスではロンドンのような大都市でさえ無理な話だ。例外として一部の特権階級 (貴族および大富豪) だけが会員制の社交倶楽部でこの自由を享受できる。日本ではあまねく庶民にこの自由が行き渡っていて、それ自体素晴らしいと思う。しかしこの「自由」のために多くの人が低賃金で不安定な深夜の奴隷労働 (「名ばかり管理職」で残業代ゼロなど) に従事していることを考えると心が痛む。

事例 103) 日本人はどこで擦り込まれたのか (フランス人の陰謀か), 「イギリスの食事は不味い」とか、挙句の果てには「イギリス人は味覚音痴だ」と思っているようだ。しかし私に言わせれば、日本人の方こそ味覚音痴だ。ろくすっぽ味も見ないで、出された料理に醤油 (soy sauce) やらソース (brown sauce) やらドレッシング (dressing) やらを盲目的にかけている人が多すぎる。塩分の摂り過ぎだ。それに日本では食事前や食事中にタバコを吸う輩も多い。イギリスではいくらニコチン中毒の喫煙者でも食事前と食事中だけはタバコを吸わない。彼らでさえ自分の食事が不味くなるのと、他人の食事の味を落としてしまう必然性を認識しているからだ<sup>51</sup>。

事例 104) セっかく日本に来たので、或る程度まともな寿司屋で食事がしたいと思った。しかし狭い店内が喫煙者の楽園 (smokers' paradise) 状態なので諦めてしまった。結局、回転寿司で済ませることにした。安い回転寿司が禁煙なのに、高級な店で味覚音痴の喫煙者がタバコを吹かすのが解せない<sup>52</sup>。

事例 105) 横浜中華街でラーメンを食べようとした矢先、タバコの煙が目鼻を突いた。隣のテーブルの女性客がタバコを吸い始めたからだ。これから食べようとしている人間の前で何たる無神経。しかもこの女は小さな子供を連れていた。

事例 106) 食事中、わざわざトイレに駆け込んで鼻をかんでいる人がいる。食事中に席を立つなんて失礼なことだ。それから食卓で爪楊枝を使ってシーハーしている下品な人 (特にサラリーマン) をよく目にする。爪楊枝こそ食後にトイレの鏡の前で使う道具である。日英の礼儀作法の違いには当惑するばかりだ。

事例 107) 日本の食パンはふわふわし過ぎて極度に不味い。パンに見せかけたまがい物だ。しかもスライスが厚すぎる<sup>53</sup>。

事例 108) 日本に「イギリスパン」という怪しげなパンがあることを知った。日本の友人の話では横浜のパン屋が、イギリス紳士の帽子 bowler hat の形にヒントを得て考案したとのことだ。このパンも大抵ふわふわし過ぎて不味い。

事例 109) 日本の西洋料理店はグラス・ワインとパンに関して極端にケチだ。「えっ、これっぽちかい?」と何度思ったことだろう。一方、日本国内の日本料理店やラーメン屋はご飯 (ライス) に関して大変気前が良い。この落差 (gap) が不思議だ。

事例 110) 京都の高級フランス料理店で接待を受けた。出されたサラダに油ぎった醤油 (oily soy sauce)<sup>54</sup> がかかっていたことに激しい嫌悪感を覚えた。客から高い金を取っておきながら、こんなインチキな物を供するとは驚き呆れたが、主催者側の顔を潰すまいとして、この件については黙っていた。

- 事例 111) 「日本人は生の馬肉 (raw horse meat; いわゆる馬刺し) を食べる」とイギリスの新聞が扇情的に報じていたが、いくらなんでも嘘だろう。なに、本当だって? 信じられない<sup>55</sup>。
- 事例 112) 新宿のデパ地下で見た透明な容器に詰まったサクランボが、あまりにも人工的で驚いた。結構な値が付いていたが、あんなプラスチックのような品物を有り難がる人がいるのだろうか。
- 事例 113) 日本の喫茶店で紅茶を注文したら、コーヒーに使う筈のガラス製カフェティエール (a cafetière) で出された。日本人は緑茶を飲む習慣があるので紅茶にも理解があると思っていたが、紅茶の淹れかたは全然知らないようだ。
- 事例 114) 夏になると「アイスマルクティー」という気持ち悪い飲物を飲む人がある<sup>56</sup>。イギリスで milk tea といえばホットしか存在しない。そして iced tea といえば伝統的にレモン味のみだ<sup>57</sup>。
- 事例 115) 日本の喫茶店で供される royal milk tea という怪しげな飲物に驚いた。あれが正式な英国式だと勘違いしている日本人が居て、なおさら驚いた。客は何やら泡立たせた熱い牛乳に tea bag を浸して飲んでいるようだ。気色の悪い飲物だ。私はイギリスでやっているように、茶葉を熱湯で浸して出来た<sup>あつあつ</sup>熱々の紅茶に少量の冷たい牛乳と砂糖を加えただけの milk tea しか許せない<sup>58</sup>。
- 事例 116) (帝国ホテルのロビーにて或る老婦人曰く) 日英親善ツアーで来日したが、緑茶ばかり飲まされて、もうんざり。早くコーヒーが飲みたい<sup>59</sup>。
- 事例 117) 缶コーヒーとは信じがたい商品だ。抽出してから何週間も何ヶ月も経ったコーヒーを賞味することが果たして技術的に可能なのか。私は日本のハイテク技術をもってしても無理があると思うが、味覚音痴の日本人にはそれでも良いのか。
- 事例 118) 日本の急須はイギリスのティーポット (teapot) と違って脇に握る所が付いているので、片手で扱うことができる。素晴らしい設計だ。なぜイギリスは日本を見習おうとしないのか。
- 事例 119) 日本の職場や家庭では電気ポットのスイッチをいつまでもオン (on) にしたままにしているが、これは電力の浪費だ。それにお湯は沸かしたてが一番おいしいのだ。イギリスには保温機能の付いたハイテク電気ポットは存在せず、単に沸騰させて自動的にスイッチが切れる仕組みの電子ニクロム線の湯沸かし器しか存在しない<sup>60</sup>。

## 8. 日本語に関すること

- 事例 120) 日本人は白人が苦勞して日本語をほんの少しだけ話すと異常なほど喜んで褒めちぎる。しかし白人が流暢にたくさんの日本語を話すと、途端に不審の目を向けるのが怖い。
- 事例 121) 日本人同士で喋っているのを聞くと、日本語とは何と耳障りな言語なのだろうと思う。その響きの醜さは他の極東言語並みだ。私は漢字には知的興味をそそられるが、日本語を習いたいとは思わない。
- 事例 122) 日本では知識人のみならず、一般人までもが何千もの漢字を記憶しているのは、それ自体驚異的だ。イギリス人には到底無理だ。しかし漢字を覚えるのに費やされる時間と労力も計り知れない。日本人は漢字を廃止する気はないのだろうか<sup>61</sup>。
- 事例 123) 日本語は人を罵倒する語彙 (vocabulary) が極端に乏しいが、なぜだろう。日本人が礼儀正しいからか。しかし第二次世界大戦時、アジアの現地人や白人捕虜に「バカヤロー!」と叫

んですぐに暴力を振るったのは、語彙の貧弱さ（ボキャ貧）が一因だったのではないか。その点、語彙が豊富な英語の方が健全だ。

事例 124) 日本では頭の狂った人間を、そのものズバリ「気違い（キチガイ）」と呼んではいけない、放送もできないと聞いて、本当に驚いた。イギリスでは lunatic や俗語の looney という単語が今でも平気で使われているし、全国放送もこれらを堂々と流している。ではどう呼べば良いのか日本人に尋ねたところ、「知的障害者（an intellectually challenged person）」だそうだ。日本には言論の自由はないのか。アメリカ以上に怖い方向に進んでいる。まるで George Orwell (1903-50) の近未来小説『1984 年』を髣髴<sup>ほうふつ</sup>とさせる相互監視社会であり、裸の王様的な状況（Emperor's New Clothes sort of situation）だ。日本に暮らしてみても、イギリス社会の健全さがよく分かった。

事例 125) 日本の街を歩いていると、その辺に書いてある文字も、人々が喋っている言葉も何一つ分からないという状況が非常に不安感を増す<sup>62</sup>。これがヨーロッパの国であれば、習ったことのない言語でも部分的にはその意味が分かるのだが。

事例 126) 街中に溢れている文字が一体どんな内容なのか、或るとき日本人の友人に尋ねてみた。するとその殆どが「マンガ喫茶 1 時間 300 円」のような広告 (adverts) と「狭いニッポンそんなに急いでどこへ行く」のような標語 (slogans) だと教えられた。日本はアメリカ型資本主義社会の最悪の部分と、北朝鮮式共産主義社会の最悪の部分が渾然一体となった国だ。日本語が読めなくて却って良かった！読めていたら気が狂いそうだ。

事例 127) 日本人は男の子に Akira や Kazutaka や Toshiaki や Yutaka など女性的な響きの名前をつけ、反対に女の子には Akiko や Kazuko や Toshiko や Yuko のような男性的な響きの名前をつける傾向があるが、これは性倒錯ではないのか。或いは彼らの音感はどうかしているのか<sup>63</sup>。

## 9. 日本人の英語に関すること

事例 128) 日本の観光地で Information と書かれた小さな建物を見つけた。入ってみたが英語が全然通じない上に、英語の資料もなかった。それならなぜ英語で Information と書いたのだろう。

事例 129) 日本は日本語の国でありながら、街中に NOVA をはじめとした英会話学校が林立しているのが不思議だ。ロンドンにも確かに英会話学校 (School of English) の看板が溢れているが、英語の国の首都だから当然だ。しかし東京にはなぜ日本語学校が少なく、英会話学校が多いのだろう。そして英語学習はこれほど盛んなのに、なぜ仕事で英語を使いこなせる日本人は少ないのだろう<sup>64</sup>。

事例 130) JR をはじめとした公共交通機関で目にする英語には、でたらめな物が多い<sup>65</sup>。日本人はなぜ英米人や英語のできる人に事前チェックを依頼しないのだろうか。

事例 131) 日本で売られている商品名が不思議だ。青くない日産 Blue Bird が道路を走行し、会社員たちはインスタントコーヒーに Creap (「ゾクッ」、「ニョロニョロ」、「マヌケ」という語感のある creep を連想させる名前) という白い粉を入れ、街中の自販機には Pocari Sweat (「ポカリ汗」とは何だ。ヒンドゥー教の神の名前か) や Calpis (「牝牛の小便」を表す cow piss を連想させる名前)



という怪しい飲料が売られている。特に Calpis の甘酸っぱい白濁液は気色悪い。日本人はなぜ自国で売る商品に変てこな英語名を付けるのか<sup>66</sup>。

事例 132) 街を歩いていると変てこな英語が氾濫しているのが目につく。特に T シャツがひどい。殆どが文法的にデタラメだが、中には見る者を侮辱しているようなメッセージや、卑猥なメッセージもある。いったい誰が何のためにあのようなメッセージを書いているのだろう。日本人があのような T シャツを着たまま海外に出れば、必ずやトラブルに巻き込まれるだろう。何より日本人は言葉の重みを理解していない<sup>67</sup>。

事例 133) 成田国際空港で買った煎餅 (rice cracker) の袋の中に小さな透明な袋を見つけた。その袋の中には白っぽい飴のような物の粒がたくさん入っていた。しかしどこにも英語の説明がないので、食べて良いのかどうか分からない。そこで日本の友人に訊いてみたところ、その粒は乾燥剤であり、食べると失明し、最悪の場合は命を落とすとの説明を受けた。英語の説明も付けずに、そんな恐ろしい商品を国際空港で売るとは実に怪しからん。外国人を毒殺しようという魂胆か。

事例 134) 日本では urban (都会的な) という英単語を電車の車内広告や集合住宅の名前などでよく目にする。きっと日本人の好きな単語なのだろう。一方、イギリスではこのラテン語起源の単語は不人気だ。外来語だから不人気というよりは、この単語の持つネガティブな語感 (貧困, 移民, 最下層, 少年犯罪, 麻薬汚染, アルコール依存, 暴力行為, 家庭崩壊, 爆弾テロのイメージ) が主因である<sup>68</sup>。

事例 135) 或る大企業の英語研修に講師として招かれた。大学の話題になったので、受講者の出身大学を一人一人訊いた。英語が一番あやふやでオドオドしている男性受講者の番になったが、「トトト、トーキョー…、ユニ、ユニ…」とやっとのことで喋っていた。University という基本単語すら出てこない様子だった。「トーダイ?」と訊いたら、「イエス」と言って頷いた。嘘をついているようには見えなかったが、意外な人物が東大卒だったので驚いた。日本では一流大学卒だからといって英語ができるわけでもないようだ。一方、イギリスでは Oxbridge 出身者は自信に漲<sup>みなぎ</sup>って堂々としていて、フランス語やドイツ語で楽々自己紹介して見せるし、ラテン語の知識なども豊富だ。

事例 136) 来日ツアーの一環として大阪の或る無名私大で特別講演を行なった。講演の直後、英文学の教授から謝礼金の入った藝術的な封筒<sup>69</sup>をいただいたが、その袋の表面に Dear Professor などと書いてあったので驚き呆れた。この日本人教授は、封筒の書き方も知らないのか。Dear で書き出して良いのは、同封した手紙や葉書の文面だけだ。こんな男が英文学の教授とは恐れ入った。

事例 137) 東京の或る有名私大の英文学の教授から国際ファックスを受け取った。全て英文だったが、1 行ごとに平均 3 箇所も噴き出したくなるような語法上の間違いがあった<sup>70</sup>。留守中のファックスだったので最初に妻が見てしまった。妻は「日本ではこの程度でも英文学の教授が務まるのですか?」と言って呆れていた。

事例 138) 話すのも書くのもブロークンな英語しかできない一部の日本人英語教員のレベルには呆れる。「盲人の国では片目の男が王である」<sup>71</sup> というエラスムス (Erasmus, 1466-1536) の有名な格言を想起させるのが、日本という「盲人の国」だ。

事例 139) 日本で英語を教えているアメリカ人教員のレベルの低さにも呆れる。或るアメリカ人女性教員と話していたら、Anglophile（イギリス好き、英国贔屓）という英単語の意味を自己流に誤解して、「イングランド人少女だけを獲物にする小児性愛者（paedophile）」と珍妙な解釈をしていることが判明して、私は愕然とした。こんな無知で愚かなアメ公（Yanks）から英語を習うから、いつまで経っても日本人の英語は上達しないのだ。日本の教育現場にも、製造業に見られる「品質管理（quality control）」の概念を導入すべきだ。

事例 140) 日本人は 1980 年代にイギリスなどから「エコノミック・アニマル（an economic animal）」と呼ばれたことについて、今でも深く傷つき、或いは立腹しているようだが、これは全くの誤解に基づいている。まず、英単語の animal に悪意はない。そんなに悪く言いたければ別の単語 beast（野獣）を使うだろう。エコノミック・アニマルとは「経済活動に本能的に<sup>た</sup>長けた者」という意味である。むしろ誉め言葉だ。これはイギリスの政治家 Sir Winston Churchill（1874-1965）が自らを評して（自画自賛して）a political animal（政治に本能的に長けた者）と呼んだことを踏まえた言い回しだ<sup>72</sup>。日本人の歴史音痴・語学音痴には呆れてしまう<sup>73</sup>。

## 10. 日本の大学に関すること

事例 141) 日本では各大学が入学希望者に入学試験を課していると聞いたが、なんという時間と金と労力の無駄だ。なぜイギリスの A-Levels のような国家資格試験を導入しないのか。

事例 142) 日本の大学は数十万円もの入学金を取っているらしいが、イギリスでは考えられない。1990 年代半ばにイギリスでも僅か数万円の入学金を導入する案が当時の保守党内閣から持ち上がったが、国民の猛反発に遭って実現しなかった。

事例 143) 日本の大学では講義時間が 90 分もあることに驚いた。人間の集中力はそんなに持続するものではないのに、なぜ一遍に詰め込もうとするのか。却って非能率だ<sup>74</sup>。

事例 144) 日本の大学は土曜日も授業をやっていると聞いて大変驚いた。勉強熱心なのか、それとも単に能率が悪いだけなのか。

事例 145) 日本の大学に案内されたが、大学生の姿はどこにもなく、私服姿のイギリスで言う中等学校（secondary school）の生徒しか居ないように見えた。えっ、あれが大学生だって?! 日本の大学生はなんとあどけない顔をしているのだろう。特に男子はヘタをすれば小学校（primary school）の児童のようにも見える。

事例 146) 日本の大学の講義に出てみた。驚いたことに授業中だというのに熟睡している学生が何人も居る。イギリスではありえない光景だ。日本の学生は違法薬物でもやっているのか。

事例 147) 同じく日本の大学の講義だが、なぜ日本の学生は教員に何も質問しないのか。イギリスの学生なら質問のみならず、教員に議論まで吹っかけるし、教員の側も学生の生意気な反論に対して丁寧に受け答えするものだが。知的な部分では日本の大学は実に物足りない。

事例 148) 来日ツアーの一環として大阪の或る無名私大で特別講演を行なった。講演の前に日本人教授から「同僚でオックスフォード出のイギリス人講師」とやらを紹介された。しかし話してみると、そのアクセント（階級方言）からも物腰からも、そして知識や話題からも、この男がオックスフォード大学で学んだ経験がないことは一目瞭然だった。それどころか私と話すことに当惑し、ひどく動揺した様子で、次に用事があるとかで、そそくさと出て行った。私自身はケ

ンブリッジ大学を卒業しているが、オックスフォードも仕事でときどき訪れるし、息子が卒業生なので、彼らの自信に満ちた物腰をつぶさに見ている。この男にオックスフォードのどの学寮 (college) の出なのか直接訊いてみたい気もしたが、やめた。オックスフォードとは言っても、せいぜい良くてポリテクニク (総合技術学校で、現在のオックスフォード・ブルック大学) か、農業専門学校の出であろう。それにしても日本の大学はなぜ雇用前に学歴を調べないのだろうか。明らかな学歴詐称なので、この大学の関係者に密告すべきかどうか迷ったが、結局やめにした。僅か数分話しただけの男の運命を私が狂わせるのも気が引けたからだ<sup>75</sup>。

事例 149) 上記の特別講演の直前に、その大学の英文学の教授が何やら日本語で私を紹介してくれた。その中に「あの一、あの一」という言葉が何度も挟まっていたので、どんな意味なのか気になった。後で別の日本人に訊いてみたところ、英語の “erm...” のように意味が皆無だと聞かされてがっかりした。私への過大な賛辞では、と期待していたのに。

事例 150) 関西の或る女子大の招きで英詩に関する特別講義 (全て英語で通訳なし) を行なった。質疑応答の時間を設けたが、案の定、誰も手を挙げなかった。全部終わって帰ろうとしたら、女子学生が一人、私に歩み寄って来てこう言った。「詩人のテニスン (Tennyson) さんが親友を亡くされたこと、お悔やみ申し上げます」と。19 世紀文学史上の出来事なのだが、この学生はそもそも私の講義を理解したのだろうか。それとも日本人は仏教徒として、こんなことにも弔意を表すのだろうか。イギリス人である私は当惑するばかりだ。

事例 151) 名古屋の或る名門大学に招かれたが、教授が暴君のように威張り散らし、大学院生たちを奴隷のように使役していた。いやなカースト制度だ。“Noblesse oblige” (ノブレス・オブリージュ: 高貴な者が責務を負う) の考え方のあるイギリスでは、上の者が下に優しく接するものだが。日英は正反対だ。

事例 152) 東京の或る有名私大の教授に招待されて東銀座の歌舞伎公演を観に行った。教授曰く “happy ending” (和製英語でハッピーエンド) とのことだったが、最後近くで主人公が切腹 (harakiri) して派手に血飛沫 (ちしぶき) を上げながら果てる場面に私は啞然とした。それでも教授は “Happy ending!” と言ってニコニコしていた。文化の違いを感じた一幕だった。

事例 153) イギリスに帰国後、大阪の或る無名私大の学長から英文の手紙を受け取った。英語自体には問題なかったが、「あなたのことが気に入ったので、ぜひ次の 4 月から本学の常勤教授になってください」という内容だったので大いに面食らった。一度講演しただけの外国人にこのような手紙を出すのは一体どういう大学なのだろう。それにしても東京ならまだしも、大阪なんぞに住みたいと思うイギリス人が居るのだろうか。

## 11. 日本の学校に関すること

事例 154) 日本の学校では 4 月に新年度が始まるのが不思議だ。どうして 4 月なのか<sup>76</sup>。

事例 155) 日本の学校や役所や事業所などから、英国議会「ウェストミンスター・鐘」のメロディー (キーンコーンカンコーン) を使った電子音が聞こえて来ることに驚いた。日本人はどこまでイギリスをパクれば (盗用すれば) 気が済むのだ。

事例 156) 通勤途中に公立中学校の近くを通りかかる。一週間に一度ぐらいの頻度で朝の集会 (朝礼のこと) をやっているようだ。男子は全員が 19 世紀の軍国主義国家プロイセン (現在のドイツ)

の陸軍士官 (Prussian Army officers) をパクったような黒い詰襟の学生服を着て、女子もそれに準ずるような黒っぽいスカートの制服を着用している。行進曲に合わせて進み、「右へ倣え」などするその様子が、まるで軍事教練のようで不気味だ。おまけにナチス風の体操<sup>77</sup>までやっている。日本人が我々白人に再び銃口を向けることのないようお願いしたい<sup>78</sup>。

事例 157) 男子高校生が学生服のズボンを故意に摺り下げた短足スタイル「腰パン (sagging)」で登下校するのが流行しているようだが、実に気色悪い。鞆をみたら都内の有名私大の附属高校の名がローマ字で書いてあったので、なおさら驚いた。

事例 158) 一部の女子中高生は、なぜ百年前にヨーロッパの男の子の間で流行した水夫服 (セーラー服) を着ている (或いは着せられている) のか<sup>79</sup>。これは性倒錯ではないのか。

## 12. 日本の女性に関すること

事例 159) 一部の女子大生や女子高生は、なぜ娼婦のような格好をして登下校するのか。

事例 160) 日本女性はなぜ脚が病的に曲がっているのか。骨格の病気が遺伝したのだろうか。男性も同様だが、服装の関係で目立つのは女性だ。

事例 161) 日本女性はなぜ内股 (pigeon-toed) で歩くのか。脚が病的に曲がっていることと関係があるのだろうか。

事例 162) 日本女性はなぜあれほど冷え性なのか。

事例 163) 日本女性が電話に出ると急に信じがたいほどかん高い声 (high-pitched voice) を出すのが気持ち悪い<sup>80</sup>。

事例 164) 日本では八重歯 (crooked teeth) で O 脚 (bow-legged) で歌唱力のイマイチ (not very good at singing) な女の子がアイドル歌手に成れることが不思議だ。

事例 165) 日本女性は白人男がほんの一瞬微笑むだけでイチコロだ。本国では絶対に女性から相手にしてもらえないようなクズ男に日本女性が身も心も捧げてしまうのは不思議だ。これは日本の男たちからぞんざいに扱われてきた結果だろうか。

事例 166) 日本では白人男性が日本女性からチャホヤされるので、何年も日本に住んだがために極度に傲慢になってしまった白人男を私は何人も知っている。反対に白人女性は日本の変態男につけ狙われることが多い。深刻なストーカー被害や強姦事件にまで発展したケースもある。日本は白人男にのみ楽園であり、それ以外の外国人には地獄だと思う。それが証拠に大抵の親日家 (Japanophiles) は白人男性である。

事例 167) 日本人の友人の家族写真を見せてもらった。友人の姉と思しき女性が写っているので、「君にお姉さんがいるとは知らなかった」と言ってみると、なんとそれは母親であり、しかももうじき 60 歳とのことだった。しかしどう見ても 30 代か 40 代にしか見えなかった。日本人はどうやって若さを保っているのだろう。

事例 168) 日本の一般家庭に招かれると奥さんの手料理が振舞われる。日本人はほぼ決まって「つまらない質素な食事です」と謙遜するが、供される料理は豪勢そのものだ。私にはその落差 (gap) が楽しい。控えめな言い方 (understatement) という点では、イギリス人の価値観とも共通するところがある。

事例 169) 日本人サラリーマンはせっかく自分で稼いだ給料を妻に全額渡してしまい、妻から毎月の



小遣いを貰って生活していると聞いて驚いた。しかも妻のことをおどけて「我が家の大蔵大臣 (Finance Minister of our household)」と呼んでいる。イギリスでは（労働者階級のほんの一部を除いて）考えられない。一見か弱いそぶりを見せながら、その実、家庭内では「財布の紐」という絶大な権力を有している<sup>81</sup>。これこそ日本女性の正体だ。

事例170) 東京で飲食店に入ったが、私が興味を持った定食は Ladies Course とのことで、男性客の私は注文を拒否された。なぜ男性客がその定食を取ってはいけないのか、満足の回答は得られなかった。また、映画館では特定の曜日に女性客だけを割引料金で入場させる Ladies Day を実施している。このように特定の性別を優遇する行為はイギリスでは違法であり、性差別ということで店側は多額の罰金を当局から徴収されるだろう。日本に来る前は、きっと女性が不当な差別に苦しんでいるのだろうと勝手に想像して同情したものだが、実際には意外や意外、男性が不当な差別を受けている現実に驚いた。

事例 171) 平日の午後、新宿の飲食店に入ろうとしたら、その日は和製英語で「レディース・バイキング」(英語で Ladies Buffet) とのことで、男である私は門前払いを受けた。ここでもイギリスではありえない男性差別が行なわれていた。それに「カップル文化」の要素が強い欧米では、女性客しか入れない店をつくっては儲けに成らない。日本ではレズビアン文化が盛んなのだろうか。

事例 172) バレンタインデーの「義理チョコ」という習慣と「ホワイトデー」と称するお返しの習慣が理解に苦しむ。

### 13. 宗教に関すること

事例 173) キリスト生誕前夜祭 (英語で Christmas Eve) である 12 月 24 日の晩は、恋人同士で過ごすものと勘違いしている人が多い<sup>82</sup>。日本人はクリスマスとバレンタインデーを混同している。

事例 174) 12 月に入ると街の飾りつけはクリスマス商戦一色だ。しかし 25 日のキリスト生誕祭の日 (英語で Christmas Day) にも店が普通に営業しているのが不思議だ。

事例 175) 12 月 25 日はキリスト生誕祭の日でありながら、クリスマスの飾りつけが突然消えるのが不思議だ。イギリスでは年が明けてもまだクリスマスだ<sup>83</sup>。

事例 176) 結婚式をキリスト教の教会で挙げた知人が若くして死んでしまったが、葬儀会場に行ってみたら仏教の寺だったので面喰らった。これは一体どういうことだ<sup>84</sup>。

事例 177) 電車の窓から教会のような巨大な建物が見える。しかし日本ではキリスト教はあまり権力を持っているようには見えないので不思議に思い、日本人の友人に訊いてみた。なんと結婚式場 (a wedding hall) とのことだった。チャペルまたは教会も併設しているが、結婚式にのみ特化していて、洗礼式も葬儀もキリスト生誕祭ミサも復活祭ミサも一切行なわないと聞いて驚いた。さらに驚愕したことに、日本人は結婚式だけをキリスト教式に挙げる人が多いとのことだ。日本人の宗教観は実に不思議だ。

事例 178) 日本の遺族は大金を出して仏教の僧侶から故人の死後の名 (戒名のことで、英語では the posthumous Buddhist name) を買うと聞いたが、本当か。もし本当なら正気の沙汰ではない。  
贖宥状 (英語で indulgence だが、通常の和訳では誤訳した「免罪符」) を販売して金銭的に潤った中世ヨーロッパのカトリック教会を思わせる。日本は西洋より少なくとも 400 年は遅れているようだ。日本にも宗教改革の波が押し寄せるのは、いつのことだろうか。

事例 179) 日本の仏教では何度も故人を偲んで memorial service (一周忌, 三回忌, 七回忌, 十三回忌といった法事のこと)をやっていると聞いた。その都度、遺族には金がかかり、坊主 (bonze) が丸々儲ける仕組みだ。日本人の死者はまるでイギリスの王族のような扱いを受けている。否、王族ですら、せいぜい死後十周年ぐらいしか偲んでももらえない。

事例 180) 仏教 (Buddhism) は西洋人にも一応その宗教性を認めることができるが、神道 (Shinto) は本当に宗教なのか。どんな教義 (dogma) を内包しているのか、さっぱり分からない。

事例 181) 東京近郊の大きな神社 (旧武蔵国に点在する氷川神社の総本社, 大宮氷川神社のこと) に案内された。参拝していた若い女性がノースリーブのシャツとホットパンツという軽装でいるのを見て大変驚いた。宗教施設にこんな肌を露出した格好で来るとは! 案内してくれた日本人に指摘してみたが、日本の神社仏閣では特にお咎めなしだそう。しかし考えてみれば、キリスト教が性 (sex) に対して不寛容 (intolerant) すぎるのであり、日本の宗教が性に対して寛容 (tolerant) だということかも知れない。考えさせられる一件だった。

#### 14. 社会, 会社, 経済に関すること

事例 182) 日本ではゴミの分別収集が煩わしい。収集車はほぼ毎日ゴミ回収に来るのに、「何曜日は可燃ごみ」「何曜日はビン・缶」などと地域によって異なり、(イギリス人から見ると) 極度に細かく分別しなければならないので困る。あんなに細かく分けることに意味があるのか。しかも近隣の日本人は、「外人は違反ばかりしている」という偏見を抱いて目を光らせている。実に腹立たしい。ゴミの出し方を間違える住民に責任を押しつけるのではなく、自治体のサービスの悪さを問題にすべきだ。

事例 183) 「日本人は勤勉」と聞いていたが、店舗や公立図書館の開店・開館の時間が通常 10 時という具合に遅すぎる。朝 9 時または 9 時半に開ける国から来ると、日本人が怠慢に見えてしまう。

事例 184) 日本の児童公園は陰惨な場所だ。鉄棒などの遊具は錆がひどく、少し触れただけで手が赤茶色に染まってしまう。ブランコの下には年中カフェオレ (イギリス英語で white coffee) のように濁った水溜まりができています。転倒すれば破傷風になりそう。あんな悲惨な状態で放置していることが信じがたい。日本の児童は惨めな状態に置かれている。

事例 185) 日本の若い親の中には、未就学児童を夜遅くまで連れまわす者がいる。子供の発育に悪い影響が出るだろう。恐るべき児童虐待だ。

事例 186) 夜の 9 時過ぎになると、駅で小学生ぐらいの年齢の子供たちが群れている。何やら楽しそうに談笑しているが、聞いた話では放課後は「詰め込み学校」(cram school; 学習塾) という非正規の教育機関でしごきに遭っているらしい。親はわざわざ高額な金を支払って子供の自由を奪っているようだが、これは児童虐待ではないのか。人ごとながら子供たちの将来が心配だ。しかし「詰め込み学校」は日本の経済にとっては大きな原動力なのだろう。

事例 187) 日本のアパートは借主が家具類を自分で買い揃えなければならないので大変だ。一方、イギリスでは家具のないアパートは誰も借りてくれないので、大家は大変だ。しかし家賃納入がほんの 1 週間でも遅滞すれば、借り手は仲介業者によって即刻退去させられる。その点ではイギリスの大家は楽だ。これに対して日本では大家の権利が弱いので、同じ滞納者を何年も抱えて、とんでもない目に遭っているという話を聞いている。日英の違いに驚いた。

事例 188) 来日前、日本は暑い国だとばかり思っていたが、東京の冬は意外に寒い。気温が極端に低いわけでもないのに暖房効率が著しく悪い。天井から温風が出てくる構造は不快である。日本でセントラルヒーティングが普及しないのはなぜだろう。日本人の友人に訊いてみると、セントラルヒーティングは設置や維持の費用がかさみ、故障が多いからだそうだ。暖房に関しては日本はかなり遅れている。

事例 189) 日本の大企業や役所や学校では分煙化が進んでいるようだが、小さな事業所では作業机で仕事をしながら喫煙している従業員が多いことを知った。喫煙者には楽園 (smokers' paradise) だが、非喫煙者には地獄 (non-smokers' hell) だ。それに作業効率の面からも問題があるのではないか<sup>85</sup>。

事例 190) イギリスなどの欧米諸国では年齢・性別・人種を理由に求職者を断るのは違法だが、日本では平気でまかり通っている。日本のような「35 歳までの男性」という限定的な求人イギリスではありえない。

事例 191) 日本の履歴書は変だ。写真を貼り付けたり、家族構成まで書かないといけない。欧米ではこれらは全て違法だ。日本には取り締まる法律がないので雇用主の横暴が野放しになっている。

事例 192) 日本では捺印という原始的な習慣が残っていることに驚いた。あんな印鑑なんぞは簡単に偽造 (forge) できるのに、まるで法的に有効な署名 (signature) のような扱いだ。日本人は「偽造が不可能なほど精巧にできた印鑑もある」と反論するが、人間の作った物なんぞ、いつかは別の人間によって偽造されてしまう運命にあるのだ。それに盗難の被害に遭ったらどうするのか。日本社会は実に簡単に人を信用してしまう社会 (trusting society) だ。これでは詐欺師など犯罪者の思うツボだ。

事例 193) 日本人と会うと、決まって口癖のように「忙しい (I'm busy.)」とか「このところずっと忙しかった (I've been busy.)」と言っている。日本人は忙しいことを美德 (virtue) と考えているようだが、生活の余裕を大切にするとイギリス人には良い印象を与えない。

事例 194) 日本人は一見勤勉なようだが、単にダラダラと仕事をしている振りをしているだけである。

事例 195) 日本人が正規の勤務時間後もダラダラと職場に残っているのが信じられない。イギリスだったら「能率の悪い従業員」という具合に悪い評価を下されてしまうし、場合によっては「家で配偶者とうまく行っていないのかな」と勘ぐられてしまう。

事例 196) 日本人の勤労者や学生はひどい風邪やインフルエンザに罹患していても平気で通勤・通学してくるので迷惑だ。公共心の片鱗も感じられない行為だ<sup>86</sup>。奴らのせいでこちらまで病気に罹ってしまったことが何度もある。

事例 197) 日本人サラリーマンは会社にこき使われて若死にすると日本の英字新聞で読んだ。「過労死 (karoshi)」というそうだ。彼らはなぜ自ら状況を改善しようと動かないのだろう。日本人の奴隷根性には驚き呆れるばかりだ。愛国歌「ルール・ブリタニア」でも歌われているように、英国人は決して奴隷にはならない (Britons never will be slaves. / Britons never, never, never shall be slaves!)<sup>87</sup>。

事例 198) 「阪神タイガースが優勝すると〇億円の経済効果」などとよく報道されるが、日本マスコミの経済至上主義には呆れるばかりだ。

事例 199) 3 週間ほど居候させてもらった東京近郊の友人宅に高価な商品を売りつけようとする電話

が数回かかってきた。その中でも特に呆れたのが墓のセールスだ。実に不愉快な話だ。イギリスでは他人宅に勝手に電話をかけて物を売り込むことは法律で禁止されている<sup>88</sup>。しかし日本では未だに野放しになっていると聞いて驚き呆れた。個人の尊厳より企業の利益優先なのだろう。恐るべき経済至上主義である。

事例 200) 日本の銀行は平日早々と午後 3 時にはシャッターを閉めて、一般客を追い出してしまう。ATM は一応使えるが、これとて平日午後 6 時以降（但し、銀行によって若干の差もあり）や土日・祝祭日に顧客が自分の口座から現金を引き出すと、「時間外手数料」を徴収する仕組みになっている。イギリスでは考えられない暴挙だ。日本の一般市民はなぜ怒らないのだろう<sup>89</sup>。

事例 201) 日本の 1 円玉には驚いた。イギリスの低額硬貨と比べても、あまりにも軽く、安っぽい造りだ。ゴミとしか思えない。私は 1 円玉の釣り銭がポケットに貯まるのが嫌になったので、すべて居候先のゴミ箱に勝手に捨ててきてしまった<sup>90</sup>。

事例 202) 日本の 5 円玉や 50 円玉の中央に穴が開いていることに驚いた。まるで石でできた通貨を使用している熱帯地帯の蛮族のようだ<sup>91</sup>。

事例 203) 日本の 100 円玉には驚いた。あんな安っぽい硬貨がイギリスの 50 ペンス硬貨と同程度の価値があるとは、とても信じられない。

## 15. 動物に関すること

事例 204) 日本のペットショップは恐るべき形態の店舗だ。あんな店を野放しにしている日本の法律が信じられないし、狭い空間に監禁された犬や猫が不憫でならない。イギリスだったら店主は動物虐待の疑いで通報されて、最終的には多額の罰金刑になるであろう。

事例 205) 日本の犬はマナーが悪い。散歩中、他の犬や通行人に吠えたり飛びかかったり、よその家の門柱に排便したりと、やりたい放題で飼い主の言うことを聞かない。特にストレスのたまったような吠え方をするのが日本の犬の特徴だ。日本人はろくすっぽ犬も躰けることができないのか。犬にもバカにされる日本人が、他国の人からバカにされるのは当然だ<sup>92</sup>。

事例 206) イソップ（本当はギリシア語でアイソポス）寓話（Aesop's fables）の中の「ウサギとカメ」<sup>93</sup>の話をも日本の昔話だと勘違いしている日本人が多いことに驚き呆れた<sup>94</sup>。いくら説明しても彼らは「日本の話だ」と言い張る。

## 16. 皇室やマスコミに関すること

事例 207) 東京のど真ん中に天皇の住まいである皇居（the Imperial Palace）が鎮座している。一般市民は立入禁止であるばかりか、一般道路も高速道路も電車も地下鉄も皆、皇居を迂回している。皇居は日本人にとって巨大で神聖な「無」の世界である<sup>95</sup>。ロンドンのバッキンガム宮殿（Buckingham Palace）では考えられない発想だ。バッキンガム宮殿は幸いにも皇居ほどの面積を占有していないし、自国民や海外からの観光客にとって馴染み深い存在だ。

事例 208) 日本の皇族は軍務やスポーツとは無縁の生活をしていて、人々の目に触れることもイギリスの王族に比べて少ないようだ。いい人たちのようだが、西欧人から見るとどこか違和感がある。一方、イギリスの王族は軍隊やスポーツとは切っても切れない関係にあるので、日英の違いに驚く<sup>96</sup>。



事例 209) 故ダイアナ妃やウィリアム王子の話題には喜んで飛びついてくる日本人が、天皇家の話題になると急に黙り込んでしまうのはなぜだ。本当に日本でも「言論の自由」が保障されているのか。

事例 210) 1998 年 5 月 26 日 (火)～29 日 (金) にかけて国賓としてイギリスを公式訪問した天皇皇后両陛下に対して、退役軍人を中心とした一部英国人が抗議運動を起こし、英国マスコミは連日これをトップニュースの扱いにした。しかし日本のマスコミはだんまりを決め込んで全く報道しなかった。緘口令が布かれたのだろうか。だとすれば日本には「言論の自由」があるようにいて、実は無い。

事例 211) 1999 年 9 月 30 日 (木) に起こった茨城県東海村の原発火災について、英国マスコミは煙を上げる原発の生々しい映像を流したのに対して、日本のマスコミは事故前の静止画像しか流さなかった。日本に居ると真実から目をそむけることにもなりかねない。恐ろしいことだ。

事例 212) 日本に来てテレビのスイッチをつけたが、なにやらドラマをやっていた。私には言葉すら分からないが、出演者の演技があまりにも稚拙で呆れてしまった。日本ではあんな程度でもテレビ俳優が務まるのか<sup>97</sup>。

事例 213) 「水戸黄門」という人気テレビドラマ（しかも長寿番組）を視たが、どこが面白いのかさっぱり分からなかった。夜の 8 時台という子供が起きている時間帯に、あのような暴力的な番組を平然と放映するとは、どういう神経をしているのだ。ブスッという音とともに日本刀で斬りつけるシーンを見て育った子供が将来どんな大人になるのか考えると空恐ろしい。また、最後近くで徳川家の紋所の入った印籠を見ただけで、皆ビビってひれ伏してしまうシーンは日本人の奴隷根性がよく現れている。イギリスでは考えられないドラマだ。

事例 214) 日本のテレビ番組で有名人にインタビューするのを見ていると、何とも歯痒い。世界で最も生ぬるいインタビュアー。それが日本人だ。とにかく彼らには適性がない。

事例 215) 「消費者金融」と称する高利貸し（サラ金; loan sharks）がテレビで堂々とコマーシャルを流しているのが信じられない。駅前でティッシュを配るのは罪滅ぼしの積もりだろうか。

## 17. 性や犯罪に関すること

事例 216) 日本は一見したところハイテク技術が進んでいる。古色蒼然たる建造物や伝統の残るイギリスから来ると、まるで未来の世界に迷い込んだような錯覚に打たれる。しかし実際に暮らしてみると、まるで 1950 年代にタイムスリップしたような気にもなる。イギリスで 1950 年代と言えば、人々が性 (sex) について初めて大っぴらに語り出した時期であり<sup>98</sup>、それでいて死刑制度がまだ存続していた時代でもある<sup>99</sup>。私は 1960 年代生まれなので 1950 年代の実体験はないが、日本に居ると奇妙な感覚に襲われる。

事例 217) 日本の映画館で西洋の映画を観ていると、裸体のシーンに一部ぼかし (a fuzz ball) が入る。偽善的で目障りであるばかりか、却って卑猥だ。気になって、そちらに目が行ってしまう。

事例 218) 日本の映倫はなぜほんの僅かな裸体シーンに規制をかける（ボカシを入れる）一方で、強姦 (rape) などの暴力シーンは野放しなのか。

事例 219) 日本では子供の目に付くところ（例えば一般書店やコンビニなど）で、なぜ堂々とポルノ製品が売られているのか。

事例 220) 日本のホテルは、高級ホテル (luxury hotels) とビジネスホテル (non-frill hotels) とラブホテル (love hotels) という明確な区分が存在し、合理的だ。イギリスでもこの考えを取り入れれば儲かるかも知れない。イギリス人の住宅環境は日本よりはましだが、日本人が思っているほどには優れていないので、ラブホテルを利用したがる層は必ず居ると思う。

事例 221) ラブホテルの店舗名や建物の外観を見ると日本人がいかにも西洋というものを誤解・曲解しているかがよく分かる。

事例 222) 1998 年に霞が関のエリート官僚たちが、新宿歌舞伎町のいかがわしい「ノーパンしゃぶしゃぶ」の店で接待を受けていた醜聞 (scandal) が大々的に報道された。風俗店と飲食店のドッキングという発想は日本ならではの物で、私には分かるようで、その実よく分からない。性欲と食欲を同時に満たそうという合理的な思想だろうか。また、女性の裸体の上に寿司や刺身などを載せて食べる「女体盛り」を供する超高級飲食店もあると聞いた。摂氏 35~36 度もある生暖かい人体の上に載せられて出てくるので、鮮度が失われて美味な筈がない。食品衛生の点も気になるし、女権擁護団体などからは「女性蔑視のサービス」として叩かれるに違いない。それにしても日本人男性の変態文化には目を見張る。

事例 223) 日本の通勤電車で連結された「女性専用車両」には驚いた。性犯罪の防止が目的だという。イギリスでは性犯罪者と聞けば通常は強姦魔 (rapists) や露出狂 (exhibitionists) を連想するが、痴漢 (gropers) という寡黙で陰湿な性犯罪者は或る意味、非常に日本的だ。

事例 224) 2000 年のイギリス女性薬漬け強姦殺人事件<sup>100</sup> や、2007 年のイギリス女性英会話講師強姦殺人事件<sup>101</sup> が記憶に新しい。しかも後者の事件の容疑者は逃走中だ。英国マスコミが大々的に取り上げ、在京英国大使館も動き、日英首脳会談でも懸案事項になった。日本は安全な国という神話がかつてはあったが、実際はうら若い白人女性にとって危険な国だ。イギリスの親たちは、若い娘が日本に行きたいと言うと反対するようになった。唯一の良いことは、東京警視庁と在京英国大使館が以前より緊密に連絡を取り合うようになったことぐらいだ。

事例 225) 日本では犯罪者、特に少年犯罪者の人権とやたらが過度に守られていて気になる。被害者の人権が軽視され、加害者の権利ばかりが守られているのが日本の恐るべき現状だ。1997 年に神戸市で起きた「酒鬼薔薇事件」では、自社の写真週刊誌「フォーカス」に容疑者少年 (当時 14 歳) の顔写真を掲載した新潮社に対して一部の政治家や知識人の間から非難の声が上がった。しかし私には彼らの声は偽善的に響き、犯人見たさで雑誌を買った。一方、1993 年の James Bulger ちゃん (2 歳) 殺害事件で、イギリスの司法当局は事件が世間に与えた重大性や世間の要求を鑑みて、犯人の 2 少年 (当時 10 歳) の顔写真・経歴・本名の公開を許可した。日本では偽善的でくだらない法律が正しい裁きを阻害しているが、イギリスではまだ幸いにも正義が機能していて安心だ。

事例 226) 来日前は大相撲 (the Grand Sumo Tournament) のファンだったが、八百長 (match fixing) 疑惑が持ち上がり、すっかり興味を失ってしまった。しかもその震源地の元「高嶺山」こと大鳴戸親方 (1942-96) が暴露本の出版直前に原因不明の呼吸疾患で急死してしまった。病死として処理されたことが私には納得できない。日本は怖い国だ。

事例 227) 繁華街で目にする暴力団や街宣右翼に対してなぜ警察は何もしないのか。或いは手出しができないのか。

## 18. 対外関係や戦争と平和に関すること

事例 228) 在日韓国・朝鮮人 (ethnic Koreans) という存在がよく分からない。彼らは日本を憎んでいるようだが、なぜいつまでも嫌いな日本に居続けるのだろうか。また、日本人も彼らをあまり好いてないようだが、イングランド北部の産業都市で見られたような人種暴動に発展しないことを願う<sup>102</sup>。

事例 229) ロシア、中国、北朝鮮、韓国といった周辺諸国が日本に対して敵意や殺意を抱いているようで空恐ろしい。日本というのは、つくづく近所に友人の居ない国だと思う。太平洋の向こう側のアメリカやカナダが日本に敵意を抱いてないのが、せめてもの救いだ。

事例 230) 日本は 1945 年の敗戦によってソ連に領土の一部 (いわゆる北方領土のこと) を横取りされたことを恨み、未だに日露平和条約の締結を渋っていることを知った。しかし戦争も経ずにリアンクール岩礁 (Liancourt Rocks; 島根県の離島で日本名「竹島」(Takeshima); 韓国名「獨島」(Dogdo)) が 1952 年以来、韓国軍によって実効支配されているのに、日本政府が何も手を打たないで能天気にも「日韓友好」を謳っているのはなぜだろう。イギリスだったら、まず国交を断絶し、最後の手段として (1982 年にアルゼンチンに対して行なったように) 宣戦布告して、戦争を始めるのだが。

事例 231) 日本は戦後の平和憲法によって手足を縛られ、「戦争」という最終手段を選ぶ自由まで剥奪されているが、よく平気で居られるものだ。日本人の精神性 (mentality) には興味深いものがある。敗戦までは強制奴隷労働 (泰緬鉄道など) やら、生体実験 (陸軍七三一部隊や九州大学医学部による人体実験) やら、捕獲した女性を使った性奴隷 (sex slaves) やら、人間魚雷 (回天のこと) や体当たり航空機 (神風特別攻撃隊、いわゆる特攻隊のこと) を使った自爆テロ攻撃という、人として最低な手段まで用いて戦争を礼賛していたのに、敗戦を境に今度は急に反戦平和教徒に成ってしまった。一方の極端からもう一方の極端へ移る日本人の病的なまでの変わり身の速さには驚愕するばかりだ。その点、イギリス人は極端を嫌い、常に中庸の道を歩んでいるので健全だ。

事例 232) 日本は戦後一貫してアメリカの「核の傘」に守られておきながら、毎年 8 月になると「世界唯一の被爆国」として広島や長崎の形骸化した式典で総理大臣が全世界に向けて「核兵器廃絶」という白々しいお題目を唱えるのは滑稽な話だ。

事例 233) 戦後生まれの日本人は第二次世界大戦についてあまりにも無知なので驚く。彼らと話していると、まるで真珠湾攻撃の翌日には広島と長崎に原爆投下があったような認識だ。途中がすっぱり抜け落ちているのはなぜだろう。きっと日本の学校では原爆の被害ばかりを強調し、原爆投下に至るまでの道りを教えないのだろう。日米のみならず、日英も血みどろの戦争をしたことすら知らない日本人が多いことに驚き呆れる。また、日本の若い世代が「シンガポール陥落 (the Fall of Singapore)」や、「死の鉄道 (the Death Railway)」の異名をもつ「泰緬鉄道 (the Siam-Burma Railway)」や、戦時捕虜 (PoWs) への戦後補償問題 (the compensation issue) について何も知らないのは空恐ろしい気がする。

事例 234) 日本に来る前は「日本＝戦争」のイメージを抱いていたが、実際に来てみると日本人は「日本＝平和」というイメージでとらえているようだ。この認識の落差 (gap) に驚いた。

事例 235) 「平和博物館 (Peace Museum)」という看板を見て入ってみたが、展示物は戦争に関する物ばかりだった。日本人はなぜ「戦争博物館 (War Museum)」という名を避けて、「平和」という空疎で抽象的な名を選ぶのだろうか。

事例 236) 英国マスコミが「戦争神社 (the War Shrine)」と呼んでいる靖国神社に行ってみた。神社附属の博物館 (遊就館のこと) にも入ってみた。驚いたことにパネルの説明に英訳も添えてあった。しかしその内容たるや啞然とした。曰く「日本は戦争には負けたが、白人アングロ・サクソンの魔の手からアジアの民を解放・救出することに成功した」と。戦後日本政府が国際社会に復帰する際に受け入れた筈の極東軍事裁判 (東京裁判) の判決内容を悉く否定している点が気になった。

事例 237) 日本人は過去の戦争について、加害も被害も含めてなぜ簡単に忘れてしまうのか。

事例 238) 米軍によって国土を徹底的に破壊され、多くの命を奪われた日本人が、東京ディズニーランド (TDL) やユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) に喜んで群がるのが不思議だ。

事例 239) 日本人教員らが「日の丸や君が代は軍国主義や植民地支配の血塗られた過去を想起させる」として、式典での起立や斉唱を拒否していると日本の英字新聞で読んだ。イギリスでは信じられない事態だ。何も知らない子供たちの前で自分らの国家 (日本) を侮辱することが許されるのだろうか<sup>103</sup>。それを支持する父母は居るのか。私はイギリスの帝国主義戦争の血塗られた歴史を知っているが、ユニオン・ジャックには何の罪もないと考えている。国旗や国歌に敬意を表するのは社会の一員として当然の行ないだ。したがって外国人がユニオン・ジャックを侮辱すれば、私は当然怒る。

## 19. 政治や行政に関すること

事例 240) 日本の為政者やマスコミは、少子化が日本を滅ぼすとばかりに騒ぎたてているが、こんなに人口過密な国の人口が減ってくれるのだから、むしろ歓迎すべきではないか<sup>104</sup>。

事例 241) あれほど腐敗墮落した LDP (自民党こと、自由民主党を指す) という政党が長期政権を維持できるのはなぜだろう。有権者がバカなだけか、それとも蔭で何か重大な不正が行なわれているのだろうか。イギリスだったら反対運動が起こってとくに政権から引きずり降ろされているだろうに。

事例 242) 日本の政界では Soka (創価学会のこと) という仏教系の宗教団体が政権与党 (公明党のこと) に食い込んでいると聞いたが、日本は本当に大丈夫なのか。オウム真理教 (Aum Shinrikyo) というカルト教団による一連の事件の衝撃が忘れられず、心配して自分なりに少し調べてみた。世界征服を企むカトリック教会をいくぶん平和にしたような教団だと分かり、少しは安心した<sup>105</sup>。

事例 243) 日本の選挙キャンペーンは実に不思議だ。屋根にラウドスピーカーを搭載した車が繁華街や住宅地を巡回する。候補者本人ではない女の声が候補者の氏名を連呼し、「よろしく願います」という私でも知っている簡単な日本語を繰り返す。候補者と思いき作り笑いの男は車窓から白手袋の手を振るだけで、あとは全て他人任せだ。このような騒音を撒き散らすやり方は、イギリスでは却って逆効果で票を減らすばかりか、違法行為として検挙されるだろう。しかし日本では効果的なようだ<sup>106</sup>。



事例 244) 日本では民主的な選挙で選出されたわけでもないのに、キャスターやらコメンテーターやらお笑い芸人やら流行作家やら NGO や NPO の市民活動家とやらが、国民の代表づらをしてテレビ出演する。国民は選挙で選んだ筈の代表者（代議士）を差し置いて、そんな「有名人」を支持しているようだ。イギリスにもその傾向がないとは言えないが、日本ほど極端ではない。日本の民主主義はこれで良いのか。

事例 245) 「日英両国は君主を抱く議会制民主主義国家で島国ということで共通している」と勘違いしている日本人が多いが、実際には東洋と西洋は全く異質だ<sup>107</sup>。英国、特にイングランドは 1215 年制定の大憲章 (Magna Carta)、1641 年に起こったピューリタン革命 (the Puritan Revolution)、1688 年に起こった名誉革命 (the Glorious Revolution)、1714 年のハノーヴァー朝 (the Hanoverians) 擁立、20 世紀初頭の婦人参政権運動 (suffrage movement) という具合に、権力者への反発や、権力という暴力装置を下から封じ込めようとした激しい歴史を有する。一方、日本の民主主義体制は国民権も婦人参政権も含めて、一時は天皇よりも偉いとされたマッカーサー (Douglas MacArthur, 1880-1964) 総司令部 (GHQ) が上から与えたものだ。日本の御しやすい従順な国民のための未熟な「民主主義ごっこ」と、イギリスの平民たちが力づくで勝ち取った真の議会制民主主義を混同されては困る。

## おわりに

ここまで見てきたように、彼らイギリス人は自らのことは棚に上げて、日本や日本人についてかなり手厳しいように見える。しかし彼らもまた、自国の体制や社会慣習や、自分の属さない「よその」階級に対しては時に激しい非難の矛先を向けることも事実である。それでも上記の事例 58 番も言及するように、イギリス人は日本人とは大きく異なり、他国からの批判を意にも介さない。その反面、時に自虐的に見えることもある。それがイギリス人である。根底には自国文化や伝統に対する揺るぎない誇りと自信に裏打ちされたものがあると筆者は見ている。願わくば我ら日本人も、イギリス人の誇りや自信の半分でも良いので、持ちあわせていたいものである。

## 註

- 1 Colleen Ward, Stephen Bochner and Adrian Furnham, *The Psychology of Culture Shock*, p. 1.
- 2 *Op. cit.* p. 181. 但し、原典は Edward Dunbar, “The German executives in the U. S. work and social environment: Exploring role demands” in *International Journal of Intercultural Relations*, 18, p. 287.
- 3 1930 年生まれ of イングランド人男性、哲学博士 (英文学)、来日回数 6 回、日本在住経験なし、イングランド在住、イングランド人の妻とは死別。
- 4 夫は 1966 年生まれ of スコットランド人男性、文学修士 (美術史)、日本在住歴 14 年、現在はニュージーランド在住。妻は 10 歳年上で、1956 年生まれ of イングランド人女性、科学修士 (化学)、日本在住歴 14 年、現在はニュージーランド在住。
- 5 ラフカディオ・ハーン (1850-1904) については半アイルランド・半ギリシアという出自がよく知られているが、1890 年の来日時にはまだイギリス帝国の臣民であり、自他ともにイギリス人と考えていた。尤も 1896 年に日本に帰化して小泉八雲となってからは法的には日本人であるが。
- 6 訪問外国人の数には日英間に歴然とした落差がある。世界観光機関が調べた 2006 年のデータでは、訪英外国人の 3010 万人に対して、訪日外国人はその 4 分の 1 にも満たない 730 万人である。日本のあまりの不人

- 気ぶりに困り果てた小泉首相（当時）が各国在京大使の知恵を借りて、Yokoso Japan というキャンペーンを始めたが、あまり成功したようには見えない。また、日本政府は 2008 年 10 月 1 日に国土交通省の外局として観光庁を設置した。しかし範とすべきイギリスも実はフランス訪問者 7910 万人、スペイン訪問者 5850 万人、イタリア訪問者 4110 万人に大きく水をあけられているので、観光客の誘致に努めている。
- 7 イギリスのエレベーター（lift）には Open ボタンはあるが、Close ボタンはない。階数のボタンを押してしばらくすると自動的に閉まる仕組みである。
- 8 保守系高級紙 *The Daily Telegraph* の東京特派員コリン・ジョイス（b. 1970）も「日本では歩行者は信号が変わるまでイギリスの倍近く待たねばならない」（コリン・ジョイス、谷岡健彦訳、『「ニッポン社会」入門——英国人記者の抱腹レポート』p. 142）と指摘している。
- 9 年配の日本人には大和田建樹（1857-1910）作詞による郷愁を誘う歌詞「夕空晴れて秋風吹き / 月影落ちて鈴虫鳴く / 思へば遠し故郷の空 / ああ、我が父母いかにおはす」の印象が強いのだろう。しかしイギリス人にはスコットランド英語の原詞 “Gin a body meet a body / Comin’ thro’ the rye / Gin a body kiss a body / Need a body cry ? / Ilka lassie has her laddie / Nane, they say, hae I / Yet a’ the lads they smile at me / When comin’ thro’ the rye.”（体と体が出会うとき / ライ麦畑の中をくぐって / 体と体が接吻するとき / 体は泣く必要あるだろか / どのおなごも彼氏もち / あたしには居ないってこった / でも男子はみんなあたしにニコっとしてくれる / ライ麦畑の中をくぐって / 筆者試訳）のもつエロティックな印象が頭から離れない（歌詞は *Rampant Scotland Directory* なるウェブサイトから引いた）。ウィキペディア（*Wikipedia*）日本語版によると、ライ麦は「草丈が大人の背丈ほどあるため、夜でなくても畑の中に紛れ込むと、キス以上のことをしても、恥ずかしい思いをすることがないようだ」とのことである。その 2 メートル近くにも及ぶ草丈は少々下品な言い方になるが、分かりやすく言うところ「天然ラブホテル状態」である。作詞家なかにし礼（b. 1938）は 1970 年に原詞の味わいに近い訳詞「誰かさんと誰かさん」を作っている。曰く「誰かさんと誰かさんが / 麦畑 / チュッチュッチュッチュッしている / いいじゃないか / ぼくには恋人ないけれど / いつかは誰かさんと / 麦畑」である。原詞では女性の立場で歌っているのに対して、なかにしは男性の視点に置き換えている。
- 10 筆者もイギリスでまだ日が浅い頃、買ったばかりの中古自転車を取り回し、得意満面これ（チリンチリン）をやらせて、見知らぬ老人男性から物凄い剣幕で怒鳴られたことがある。その刹那は老人を恨んだが、後になって冷静に考えてみると、自らの無知から来るマナー違反に恥じ入るばかりであった。
- 11 但し、これは Suica 等の IC カード導入以前の話である。
- 12 英題も *Rashomon* だが、イギリス人は「ラッシュモン」と発音する。
- 13 この「娼婦」という指摘については、本学の一部学生から興味深い反応があった。曰く「イギリスでは今でも娼婦による客引きが行なわれているのか」との質問だった。これについてはその通りであり、否定のしようがない。イギリスでは「売春行為（prostitution）それ自体は合法（legal）」とされているが、「客引き行為（soliciting）は違法（illegal）」という不思議な法律が存在する。客引き行為なく売春を行なうのは困難であろう。そこで大半の娼婦（prostitutes）は違法行為を行なっていると思うが、罰せられることは滅多にない。他方、ヒモ（pimp）として売春婦を金銭的に搾取するのは非合法で、そのような者（たいてい男）は発覚すれば厳しく罰せられる。イギリスの法律では「女性が自らの自由意志で性売することは問題ない」という考えだ。しかし「個人営業」となれば、恐ろしい病気を持っている者も多だろう。一般人は接触を避けるに越したことはない。一方、日本では建前上「売春は違法」としながらも、様々な形態の性欲産業（日本流の婉曲語法では「風俗営業」、略して「風俗」や「風営」）が存在することは、不名誉ながらイギリス人を含む広く巷間に周知されている。私見だが売春行為そのものを禁止する日本の法律は偽善に満ちている。日本もイギリスのようにヒモなど、女性を搾取する暴力団を厳しく取り締まるべきであろう。
- 14 後に倒産して物議を醸すことになる新風舎から、滋賀県長浜市の寺の住職吉田龍恵（b. 1930）が自費出版した著書は、一部のウェブサイトやブログなどで近年最も悪評を受けた書籍の一つである。巻頭からこんな調子だ。「アテネからカイロに向かう TWA の機中でのこと。私のそばに若いアメリカ人女性、その右

にドイツ青年が座っていた。こしばらくアメリカ人との会話ができていないので、これは良い機会だと思った。しかし、私は話題が見つからず黙っていると英語が話せないと思われるし、ニュースも知りたかったので、英語のウィークリーを読み始めた。英語が分かるということを見せるジェスチャーだった。ところが、しばらくして、そのアメリカ女性は、反対側のドイツ青年に『英語が話せますか？』と尋ねてから歓談し始めた。白人は自ら進んで、こちらすなわち有色人種には話したくないというのが私の体験上の印象だ。」(吉田龍恵『世界けんか独り旅』p. 11)とある。「けんか独り旅」とは、怒りっぽい坊さんが「人種差別や人種偏見は怪しからん」と啖呵を切ることかと思いきや、実際のところ、著者が海外で体験した少々不快な出来事に対して日本語で愚痴をこぼすという内容だ。「有色人種には話したくない」のではなく、「これ見よがしに英字新聞を広げ」、「白人に話しかけられるのを待っている」ような人間に白人は胡散臭さを感じることは想像もつかないようだ。なお、著者は米国ビジネスコミュニケーション学会国際委員会副委員長、米国アイオワ州立大学客員教授、滋賀県社会教育委員連絡協議会副会長、長浜ユネスコ協会会長、放送大学滋賀学習センター所長、滋賀県視覚障害者福祉協会理事を歴任し、現在は滋賀大学名誉教授、滋賀県民共済生活共同組合理事長、社会福祉法人悠悠会理事、真言宗豊山派舎那院住職、滋賀県盲教育後援会理事という肩書きをもつそうである。

- 15 イギリスには精算機という機械もないので、乗り越しが発生した時点で高額な罰金を支払う羽目になる。
- 16 このイギリス人は、1973年3月13日(火)に埼玉県で起こった上尾事件を知らない。
- 17 欧米の鉄道駅は街外れの場末に位置していることが多い。欧米に「駅前の一等地」という概念はない。
- 18 痰や唾を吐き散らすのは黄色人種の特徴の一つである。中国人は日本人よりさらに極端で、電車やバスの床にも唾を吐く。実際筆者がマレーシアを訪問した折、華人の老人男性がバスの床に唾を吐いている光景に出くわしたときは、体が凍りつくような思いだった。また、ロシア人など旧ソ連の人々も外見は白人ながらモンゴル人の遺伝子を受け継いでいるせいか、道にしばしば唾を吐く。
- 19 これは農耕民族特有の寛ぎ方なのかも知れない。欧米にも所謂「ジベタリアン」(地べたに尻を付けて座る者、主に若者)は居るが、野グソを思わせるようなしゃがみの体勢は日本ならではである。
- 20 イギリスでは21世紀に入っても一部の中長距離の列車で19世紀そのままの手動式ドアが健在である。
- 21 中国人はもっと極端で、血縁者にのみ優しい傾向がある。
- 22 シンガポールの欧亜混血(Eurasian)作家(父親がイギリス人)レックス・シェリー(b. 1930)は「内」と「外」という古典的な概念を日本体験初心者に説いている(Rex Shelley, *Culture Shock Japan*. pp. 149-151)。
- 23 経済ジャーナリストで自らも英米への海外赴任の経験のある宮智宗七(b. 1931)は、日本人帰国子女が帰国後に抱く違和感を「逆カルチャー・ショック」と規定し、自ら実施したアンケート結果から次の回答を引いている。「▼『マナーの悪さ——人を押しのけて電車に乗る、次に来る人のためにドアを開けておいてあげない、老人や女性への思いやりのなさ、身体障害者(handicapped people)への配慮のない公共施設などにそれを感じる』/ ▼『駅で切符を買うとき運賃表を見ていたら、うしろから突き飛ばされた』/ ▼『ビルやホテルの入口のドアを開けてもらっても、何もいわないで通りすぎる』/ ▼『狭い道で相手が通りすぎるまで、こちらが待ってあげても、だれ一人礼もいわない。アメリカなら必ず相手は“Thank you”(ありがとう)といい、こちらら“You're welcome.”(どういたしまして)と言葉を交わしたのに……』/ ▼『とにかく人と人との対話がない。目が合っても、こちらからあいさつしても、知らんぷりの人が多い』(宮智宗七『帰国子女——逆カルチャー・ショックの波紋』pp. 58-9)。一方、イギリス在住のハウスキーパー高尾慶子(b. 1942)は世代間の違いを指摘している。曰く「今日、日本で一番不作法で行儀が悪いのは老人男性である。そして、英国でいちばん行儀がよくて、親切で、あたたかいのは老人男性である。英国の老人男性はシルバーシートに競って座ろうなどとはしない。あくまで、女性に席をゆずる。(中略)今回、十一年ぶりで、日本へ帰国して驚いたことの一つは、日本の中年男性、そして、若者が非常に礼儀正しかったことである。以前なら、街や列車の中でぶつかりあうと、キッとにらむか、捨てゼリフを投げ捨てたものだったが、今日では、『あっ! すみません!』と向こうからすぐ言葉が出てくるのには本当に感激してしまった。(中略)しかし、日本の老人はあいかわらず、行儀が悪く、子どもっぽかった。敗戦の経験はこ

- うも人格を落とすのかしら、といった私に、母は、/『いいえ、戦前、戦中、戦後、日本の男はずっとこうよ。特高なんていばりくさって、女子どもに容赦しなかったよ』/ といった。そう、そうだったと思う。そういう連中が、連合軍兵士だった若者が捕虜になったとき、大喜びでいたぶりまわしたのだ。そしてその後始末を、戦争を知らない日本の若者は今日もお負わされている。(後略)」(高尾慶子『イギリス人はかなしい——女ひとりワーキングクラスとして英国で暮らす』pp. 21-22)。
- 24 バジル・ホール・チェンバレン(1850-1935)は百年以上も前にこう書いている。「個人的な問題をたずねられても決して怒らぬことである。そのように質問してくるのは、親切で好意を寄せているという日本人独自の表現方法なのである。」(B・H・チェンバレン・W・B・メーソン・楠家重敏訳、『チェンバレンの明治旅行案内——横浜・東京編』p. 54)と。一方、ハンガリーからの亡命者で英国ユーモア作家の大御所ジョージ・ミケーシュ(1912-87)は、その著書『円いずる国』(1970)でこう書いた。「私が日本に行く前に、日本をよく知る多くの人から、日本人には決して直接的な質問をしてはいけませんよ、と事前警告を受けた。もし質問したにしても、返答はないと。個人的な質問は英国以上にまずいという。日本人とは友情を育むことなんてできやしないとか、日本人とかなりの程度まで親しくなることもできないとか、一緒に冗談を言うなんて絶対と言っていいほどありえない、とのことだった。(中略)そういった話は、『不可解な東洋』という私の抱くイメージに合致したので嬉しくなった。(中略)ところが私の失望をご想像願いたい。行く先々で続けざまに興味深く反応の良い人々に出会ったのだから。心が広く寛大な男女が公私問わずどんな問題でも進んで論じようとしているのだから(後略)。」(George Mikes, *The Land of the Rising Yen*, pp. 19-20)と皮肉たっぷりだが、日本の知人らへの賛辞も読み取れる(筆者試訳)。ジョージ・ミケーシュ・倉谷直臣訳、『円出づる国ニッポン』(Tokyo: 南雲堂, 1972)は絶版のため未見。
- 25 イギリスには校歌や社歌はほとんど存在せず、国民が一致団結できる愛国歌や賛美歌がいくつか存在する。
- 26 イギリスやオーストラリアの「逆ピースサイン」は、アメリカ人相手に中指を突き立てる動作に等しい。
- 27 日本でもフランス文学者の桑原武夫(1904-88)が戦後いち早く「俳句は第二藝術である」と唱えたこと(俳句第二藝術論)が論争を呼んだ。
- 28 将棋で最後まで裏切る可能性がないのは、理論的には王将だけだ。なんとも孤独な王である。
- 29 イギリス人の揺るぎない自信に日本人はタジタジだ。
- 30 これについては、特派員コリン・ジョイスも似たことを言っている。曰く『『イギリスと日本は似ている』。これまで何度も耳にしたフレーズである。しかし、こう明言しても、重大な国家機密を漏洩したことにはならないだろう。『イギリスと日本は似ている』と言ってきたのはすべて日本人で、イギリス人はひとりもない、と。一度だけ例外があるが、それはイギリス人の友人が、『イギリスと日本は似ている』という日本人のヘンテコな妄想を耳にしたことがあるかと、ぼくに尋ねてきたときのことだ。』(コリン・ジョイス・谷岡健彦訳、『「ニッポン社会」入門——英国人記者の抱腹レポート』, p. 139)。
- 31 土壌の影響で、同じ種類のアジサイを植えても日英で異なった発色になる。
- 32 確かにイギリスで見る月は全体的にもっと青白い。他方、日本の黄色い月は東南アジアで見る月に似ている。これはヨーロッパに比べて赤道に近いから黄色く見えるのであり、大気汚染とは関係ないだろう、と筆者は反論してみたが確信はもてない。面白いことに、日本人の子供はお絵かきで太陽を赤く塗るが、西洋人の子供は黄色く塗る。
- 33 不動産価格も含めて計算すると、東京は世界でもトップレベルの物価高の都市である。
- 34 最近イギリスでも日本などアジア諸国の真似をして日曜営業の店が増えつつある。
- 35 フランスの思想家ロラン・バルト(1915-80)がその著書『表徴の帝国』(1970)の中で似たような指摘をしている。フランス語の原典(Roland Barthes, *L'Empire des signes*, pp. 47-51)では“Sans adresses”と、その項目が題されている(実際の印刷では大文字のみの表記)。アメリカ英語の英訳本(Roland Barthes. Trans. by Richard Howard, *Empire of Signs*, pp. 33-37)では、“No Address”となっている。なお、詩人の宗左近(1919-2006)による和訳本(ロラン・バルト・宗左近訳、『表徴の帝国』)は、誤訳の羅列に過ぎないことが仏文学者の鈴木道彦(b. 1929)の口頭による指摘(1992年)でよく分かったので、反面教師としてしか参照せぬほうが良い。バルトとは別に、ちょうど同時期にジョージ・ミケーシュ



- は、その著書『円いずる国』（1970）でこう書いた。「日本人が混乱状態を作り出す能力は、英国人にも匹敵する。日本人が適切な住所体系を拒絶することで生じさせている混乱は驚異的だ。（中略）結果として世界のどこよりも、この日本に於いて多数の郵便配達夫がキチガイ病棟（原文ではlunatic asylums）に入っているのである。ひどい発作を伴う神経衰弱こそが、郵便配達夫につきものの認定済の職業病なのである。」（George Mikes, *The Land of the Rising Yen*, p. 98）と（邦訳未見のため筆者試訳）。
- 36 イギリスでは建築予定または建築中の物件の計画書を誰でも自由に閲覧し、工事の差し止めに要求する権利が保障されている。
- 37 日本の他にはスイスの市中銀行が開放的なスタイルを採用しているが、その他の国々では防弾ガラスで仕切られた構造になっていることが多い。
- 38 イギリスの病院は無料診療が基本なので、金銭の受け渡しが無い。
- 39 確かにイギリスではありえない話だが、フランス及びスイスのフランス語圏ではよくあることである。
- 40 確かにイギリスではありえない話だが、フランスや旧ソ連諸国ではよくあることである。ラトヴィアの田舎で出会ったロンドンの郵便配達夫が現地のトイレにひどく恐れをなしていた。日本だけではないのである。
- 41 やはりフランスの公衆便所に、無駄にハイテクな傾向がある。
- 42 上と重複するが、フランスでも似たような事態が起きる。
- 43 一方、イギリス人は体から出る音は自然の摂理と考え、至って寛容だ。「音姫」はイギリスではありえない装置だ。
- 44 この点、中国はもっと極端で、中でしゃがんで用を足す部分にもドアがなく、仕切りすら無いのも珍しくない。
- 45 イギリス人は家庭生活を大事にするので、同僚と飲みに行くのは平日の昼が基本である。ビールを1パイント（568 ml）飲んでから午後の仕事を平然とこなす。一方、日本人などの黄色人種の多くは血中に侵入してくるアルコールの毒性を抑える酵素が遺伝的に不足または欠落しているため、すぐに悪酔いしてしまう。筆者の場合、アルコールは平気だが、生の牛乳ですぐに下痢をしてしまう。これも黄色人種に欠落した酵素の問題だと考えられている。
- 46 イギリスではafter-dinner speech といって、飲食がおおむね済んだところでスピーチが始まる。スピーチを引き受けたからには聴衆を笑わせねばならない暗黙の掟があるので、聞いているほうは楽しいものだ。
- 47 日本在住の白人男性の中には、このようなお酌<sup>お酌</sup>を避けるため、わざとアルコール中患者のように瓶ごと呷<sup>あお</sup>ってビールを飲む者もいる。
- 48 2007年9月に筆者がスコットランドの地方都市Perth（豪州西海岸Perthの本家本元）のpubを訪れたところ、日本式にギンギンに冷やしたビールを供されて大いに閉口した。
- 49 日本でこの温度で供するのは、ワイン専用冷蔵庫が登場するまで、ほぼ不可能だった。元々日本は赤ワインの消費には（それに生産にも）適さないようである。
- 50 日本人観光客もヨーロッパの飲食店で出される無料のパンについて同様の失敗をしている。
- 51 スコットランドでは2006年5月以来、イングランド&ウェールズでは2007年5月以来、職場と飲食店で全面禁煙実施中。
- 52 ちなみに1980年代後半から90年代前半にかけて、日本テレビは野球の巨人戦の実況中継を高音質のステレオ音声で流し、当時予算の乏しかったNHK教育テレビはクラシック音楽の番組を低音質のモノラル音声で流していたため、外国人の失笑を買った。特にクラシック通の多いドイツでは今でも語り継がれる「日本ネタ」（Japan-Witze ヤーバン・ヴィッツェ）になっている。
- 53 イギリス人は薄切りの食パンをカリッと香ばしく焼いたトーストが好きだ。
- 54 和風ドレッシングのことであろう。
- 55 イギリス人は馬が可哀想という理由で馬肉は食べない。馬肉を食す習慣のあるフランスやドイツの人々を野蛮で残酷だと考えている。ましてや生で食べる日本人は、イギリス人から見れば正気の沙汰ではない。しかしそれでも韓国や中国の肉食文化に対する嫌悪感に比べれば風当たりは弱い。

- 56 黄色人種は牛乳に糖類と香料と着色料を加えた冷たい飲み物が好きだが、白人はこれを好まない。
- 57 近年はイギリスでもピーチ味が登場した。
- 58 イギリス人は一般的に飲食、特に紅茶の淹れ方に関しては頗る頑固である。
- 59 イギリスの上流や中産階級はコーヒー好きだ。
- 60 イギリスの電圧は世界最高の 220～240 ボルトなので、すぐにお湯が沸く。一方、日本は 100 ボルトという世界最低電圧なので、なかなか湯が沸かない。
- 61 漢字の問題についてはバジル・ホール・チェンバレン（1850-1935）が百年以上も前にこう書いている。「日本語は中国語とは元来関係がないのであるが、莫大な数の漢語を採り入れた。したがって当然なことだが、これら漢語とともに中国文明が日本列島に入ってきた。今日でも、新しい事物や思想を示そうとするときには、日本語は漢字の助けを借りなければならない。（中略）ちょうどわれわれ自身がラテン語やギリシア語を借用するのと同じである。このことから奇妙な結果が生ずる。すなわち、今日の日本の諸制度の欧化は、過去において儒教がこの国を支配していたときよりも、はるかに日本語を中国に隷属せしめたのである。」（チェンバレン・高梨健吉訳『日本事物誌 2』「日本語（Language）」の項 p. 18）。「日本の多くの鉄道の名称は独特のものである。（中略）播磨線は播磨国と但馬国を結ぶもので、播磨という漢字の最初の字が他の文中ではバンと発音され、但馬の第一字は、正しくはタンである（この場合はそのように発音されないが）という事実から名前が出ている。恐らくヨーロッパの初学者がこれを聞いたら頭がグラグラするであろうが、日本人にはそれがきわめて単純明白に思えるのである。」（同書「鉄道（Railways）」の項 p. 184）。「多くの知識人は、日本国民が今にもその書き言葉の様式を捨てて、その代りにわれわれの様式〔ローマ字〕を採用するであろうと考えている。そのような大きな変化が起る機会はあるはや少しも存在しない。（中略）現存する書き言葉が、思想を簡潔に、明確に伝達するのに、口語よりも優れているからである。漢字の助けを借りることによって、日本の著作家は、ヨーロッパの新聞記事、ヨーロッパの専門書の内容を（中略）すべてにわたって、書いてある文章の細かいニュアンスまで日本語に訳すことができる。知的な武器を捨てて、石器時代の人間と同列になることを欲するような人が、いったいいるだろうか。（中略）しかし、もう一つの原因がある。（中略）表意文字は明らかに、本来から有する力強さがあって、同一の領域内の競争では、表音文字に勝つ場合が多い（しかし、全くそれに取って代るというわけにはゆかない）。（中略）ヨーロッパ人の中には、アルファベットは完璧なものであると教えこまれたばかりでなく、世界中の国々がこれを認めて採用すべきであると信じ込んでいる人びとがいる。著者は、それらの人びとが、前述の問題点をもう一度考えていただくことを望む（後略）。」（同書「日本文字（Writing）」の項 pp. 318-19）。けだし慧眼と言わずして何と形容しよう。
- 62 ラフカディオ・ハーン、転じて小泉八雲（1850-1904）は百年以上前にこう書いている。「こうして、さまざまなものの不可思議さに戸惑っているうちに、ついに天からの啓示のように、ある思いがひらめくであろう。名画のようなこの町並みの美しさのほとんどは、戸口の側柱から障子に至るまで、あらゆるものを飾っている、白、黒、青、金色のおびただしい漢字とかなの賜物ではなかろうかと——。（中略）そして、私と同様に、日本語の中にアルファベットを導入しようという、あの忌まわしい『日本ローマ字会』という功利主義団体を許せなくなるであろう。（中略）日本人にとって、文字とは、生き生きとした絵なのである。表意文字は生きているのだ。それらは語りかけ、訴えてくる。そして、日本の通りの空間には、このように目に呼びかけ、人のように笑ったり、顔をしかめたりする、生きた文字が溢れている。これらの文字が、西洋の生命を感じさせない文字と比べてどうなのかは、この極東に住んだことのある人にしかわからない。」（ラフカディオ・ハーン・池田雅之訳『新編 日本の面影』「東洋の第一日目」の項 pp. 14-15）。
- 63 西洋人は名前の持つ響きを大切にすが、日本人は聴覚には弱く、視覚を大事にする民族なので、書いた文字（漢字等）の見た目や画数が最重要である。なお、中国人は視覚と聴覚の両方に気を配る。
- 64 責任の一端は筆者のような英語教員にあるのだろう。
- 65 たとえば、「浦和・埼玉新都心通過 Don't stop at Urawa and Saitama-Shintoshin!」の類い。
- 66 ポカリスエットはアジア諸国や中東でも同じ名前で売られている。カルピスは「カルシウム（calcium）」と、インドのサンスクリット語（仏教で言う梵語）で「美味しい味」を表す「サルピス（Sarpis）」をかけ

- 合わせた造語であり、小便 (piss) とは無関係である。創業者三島海雲 (1878-1974) の相談を受けた日本作曲界の大御所山田耕筰 (1886-1965) がこの「カルピス」という語感が気に入ってしまったのが、後の不幸の始まりである。
- 67 近年では「美しい汗 がんばろ」、「原宿暴動」、「心中」、「愚か者」、「なぬ」など変てこな日本語の書いてある T シャツやジャージが海外でブームだが、日本で売られている英語 T シャツよりは数倍ましだろう。
- 68 イギリス人は日本人とは反対で、rural (農村の) や countryside (いなか) や meadow (牧草地) や pasture (放牧地) や footpath (いなかの遊歩道) という単語が好きだ。
- 69 熨斗袋<sup>のしふくろ</sup>のことであろう。
- 70 具体的には、\*Please teach him my whereabouts. (Please *tell* him my whereabouts. の誤り) や、\*I am delightful to hear from you. (I am *delighted* to hear from you. の誤り) といった類い。
- 71 ラテン語の原典で、In regione caecorum rex est luscus. 英訳では通常、In the land of the blind the one-eyed man is king.
- 72 この点に関しては、職業外交官の多賀敏行 (b. 1950) の説明が明快だ (多賀敏行. 『「エコノミック・アニマル」は褒め言葉だった——誤解と誤訳の近現代史』 pp. 44-49)。多賀は「エコノミック・アニマル」としばしば抱き合わせで言及される「ウサギ小屋」という蔑称も、日本の自虐的ジャーナリストらによって誤解されて伝えられたと説明している (同書 pp. 57-60)。これは俗に Eurocrat と呼ばれるブリュッセルの EC (現 EU) 官僚が書いた非公開報告書のフランス語原文にあった cage à lapins (カージュ・ア・ラパン) の意味 (本来は「集団地」) を取り違えた共同通信記者による英語への誤訳 rabbit hutches (ウサギ小屋) が諸悪の根源だそうである。誤訳とはかくも恐ろしいものだとは。
- 73 イギリス人は一般に歴史には強いが、大多数が語学音痴だ。
- 74 イギリスの大学では 1 限、2 限などの時間の概念はなく、講義時間は 60 分が基本だ。○時 00 分に始まって次の時間の 00 分に終わるという考え方で成り立っている。しかし休み時間を公式に設けていないため、教室間の移動時間やトイレ休憩を考慮して、遅く始めて早く終わる習慣になっている。したがって実際の講義時間は正味 45~50 分程度である。一方、日本の大学の講義時間がかくも長いのは、私見だが母音過多で同音異義語の漢語に依存しすぎる日本語が原因であろう。
- 75 日本の大学の外人教員は単なる英会話要員として雇われていることが多いので、たまに訪日するイギリスの学究から見るといかかわしい人種に見えるものである。
- 76 ちなみに欧米諸国や中国では 9 月、豪州では 2 月、韓国では 3 月に新年度が始まる。
- 77 ラジオ体操のこと。但し、その源流はドイツではなくアメリカである。
- 78 イギリスの主要紙の国際面は、しばしば日本の学校の「不気味な場面」を写真つきで紹介するため、日本人留学生や駐在員の子弟・子女は帰国が近づく<sup>こあきんど</sup>と憂鬱になる。
- 79 日本の男子学生服が明治の頃、プロイセン (現在のドイツ) 陸軍の軍服を模したのに対して、女子の制服の代表格セーラー服は大正期に日本海軍の水兵服 (但し、その源流は英国海軍) を模したと言われている。
- 80 イギリス女性にも多少その傾向はあるが、日本女性ほど極端ではない。
- 81 バジル・ホール・チェンバレンは、「すなわち、農民の婦人や、職人や小商人の妻達は、この国の貴夫人達よりも多くの自由と比較的高い地位をもっている。これら下層階級では、妻は夫と労働を共にするのみならず、夫の相談にもあずかる。もし妻が夫より利口な場合には、一家の財産を握り、一家を牛耳るのは彼女である。」(チェンバレン. 高梨健吉訳. 『日本事物誌 2』「女性の地位 (Status of Woman)」の項 pp. 303-4) と書いている。
- 82 これは 1980 年代バブル期に東京などの大都市圏で起こった歴史の浅い習慣である。
- 83 厳密には翌年の 1 月 6 日までがクリスマスとされる。
- 84 バジル・ホール・チェンバレンは、「一度ならず著者が経験したことだが、ヨーロッパ人旅行者が日本人に、あなたの宗教は何か、仏教か神道かとたずねると、その日本人は全く困った顔つきをするので、著者はおもしろく思ったものである。どんな気持ちでそんな質問をするのか、日本人にはどうしても分からないのである。(中略) われわれによく見られるような、他の宗教に対するあの酷しい差別は彼らに見ることはで

- きない。/ 日本人のこの締りの無さ、そして著者が日本人を『宗教心がない』（アンデヴォーショナル）と上に述べたために、読者が思い誤るようになってはいけない。信心と倫理、神学と行為は別物であることを銘記せねばならない。（後略）」（チェンバレン・高梨健吉訳、『日本事物誌 2』「宗教（Religion）」の項 pp. 186-7）と書いている。
- 85 スコットランドでは 2006 年 5 月から、イングランド&ウェールズでは 2007 年 5 月から職場と飲食店で全面禁煙実施中なので、建物の出入口前で喫煙する人の姿が目につく。
- 86 日本人からすれば、自分が会社や学校を休むことで、所属する課や班や部活動などに迷惑を掛けることを極度に恐れてのことであろう。イギリス人などの西洋人とは別の意味での「公共心」の発露と言える。しかし客観的に見れば、西洋人の考え方のほうが合理的である。チームとしての成功の可能性も西洋人に軍配を上げざるを得ない。
- 87 しかしこの歌詞とは裏腹に、1942-45 年にかけてイギリス人を含めた連合軍捕虜が、日本軍によって過酷な奴隷労働に従事させられた事実と、その戦後賠償金や戦後和解の問題は今でも日英間に蟄る最大の懸案事項だ。
- 88 イギリスの法律は抜け道だらけなので、「特別キャンペーンであなたが選ばれました!」という言葉で勧誘する悪徳業者もある。しかしそれでも法律が一応あるので、一般市民は日本ほどには悪徳業者に悩まされることはない。
- 89 イギリスでは一年中どんな時間帯に現金を引き出しても手数料は無料で、しかも他行の ATM からでも無料で引き出せる。しかしイギリスでもその昔、銀行間の競争が激しくなかった頃は、今の日本と似た状況だった。
- 90 その 1 円玉を筆者は拾って消費した。
- 91 イギリス以上に「進んでいる」とされる北欧のデンマーク王国やノルウェー王国も穴あき硬貨を流通させている、と筆者は反論しておいた。
- 92 国レベルでは日本は先進国の経済大国として一定の尊敬を集めるが、人的レベルでは、その自信のないオドオドした態度や、卑屈にペコペコする仕草や、口下手・語学音痴が災いして（これらは特に男性に顕著）、他国人からバカにされることが多い。
- 93 英語では順序が逆で“The Tortoise and the Hare”となり、競争に勝った亀を先にもってきている。
- 94 この寓話は 1593 年にカトリックのイエズス会宣教師によって初めて日本に伝えられた。
- 95 東京と皇居の関係については、フランスの思想家ロラン・バルト（1915-80）がその著書『表徴の帝国』（1970）の中で似たような指摘をしている。フランス語の原典（Roland Barthes, *L'Empire des signes*, pp. 43-46）では駄洒落で“Centre-ville, centre vide”と、その項目が題されている（実際の印刷では大文字のみの表記）。アメリカ英語の英訳本（Roland Barthes. Trans. by Richard Howard, *Empire of Signs*, pp. 30-32）では、“Center-City, Empty Center”となっている。言葉遊びが訳せないのがもどかしい。日本語にはどんな風に訳せるだろうか。「都心部、とくにしーんと空っぽ」でどうだろう。
- 96 戦前は日本の皇室も英国王室を模範にしていたので、軍と深い関係にあった。
- 97 イギリス人は自国のテレビ番組に絶対の自信を持っている。
- 98 ジョージ・ミケーシュ（1912-87）はその著書『円いずる国』（1970）で、「1955 年以前には性生活なるものがほとんど知られていなかった英国が、今や世界のセックスの都となった」（George Mikes, *The Land of the Rising Yen*, p. 100）と書いている（邦訳未見のため筆者試訳）。
- 99 イングランド&ウェールズ及びスコットランドは 1965 年に期限つきで死刑を停止し、1969 年に制限つきで廃止した。誤認逮捕と誤審が相次いで発覚したのが主な理由だ。遅れて北アイルランドも 1971 年に制限つきで死刑を廃止した。なお、英国全土での死刑制度の完全撤廃は 1998 年だが、実際には 1964 年 8 月 13 日以来、イギリスでは一件の死刑も執行されていない。
- 100 元在日朝鮮人の帰化日本人でパチンコ資本御曹司の織原城二被告（b. 1952）が、元 British Airways (BA) 客室乗務員で六本木の英国人ホステス Lucie Blackman 嬢（1978-2000）を殺した事件を指す。
- 101 医師夫妻の息子の市橋達也容疑者（b. 1979）が NOVA 英会話講師 Lindsay Ann Hawker 嬢（1984-2007）



を殺した事件を指す。

- 102 1923 年の関東大震災では、「朝鮮人が放火した」というデマによる朝鮮人リンチ事件が起こっている。
- 103 日本では既に明治の昔からこの種の論争が起こっている。1891 年 1 月 9 日のこと、第一高等中学校（現、東京大学教養学部）の嘱託教員にしてキリスト教徒であった内村鑑三（1861-1930）が、講堂で挙行された教育勅語奉読式に於いて「天皇陛下御親筆」の署名に対して最敬礼を行なわなかったことが最初教員や生徒らによって非難され、やがては世間の激しい弾劾を受けた。この事件によって内村は体調を崩し、翌月に依願解職したとのことである。これが世に言う「内村鑑三不敬事件」あるいは「第一高等中学校不敬事件」である。しかし現代の教員たちとは違って、内村とて自国の国旗や国家を侮辱したわけではなかった。一方、松江の英語教師ラフカディオ・ハーン（1850-1904）は内村のことに直接言及したわけではないが、前任者のイギリス人教員が天皇の「御眞影」の前でお辞儀を拒否したことを石原喜久太郎という生徒から聞くに及んで、こう言っている。「それは、君、その先生こそが野蛮人なのです。卑俗で、無知で、野蛮な凝り固まったクリスチャンなのです。私はあなたがあなたの国の天皇陛下を尊敬し、国法に従い、天皇が君にお求めとあればその時はいつでも君がそのお召しに応じ、赤誠の血を祖国のために捧げる覚悟が来ていることは、君の最高の社会的義務であると信じます。（後略）」（小泉八雲・平川祐弘訳、『明治日本の面影』『英語教師の日記から（From the Diary of an English Teacher）』の項 pp.55-56）と。なお、この文章は「内村鑑三不敬事件」の 3 年後に公にされている。しかしバジル・ホール・チェンバレン（1850-1935）の態度はハーンとは大きく異なり、「この礼儀作法の問題は、外国人やこの国のキリスト信者たちに大きな不満をひきおこした。この習慣は古いものではなく、一八九一年〔明治二四年〕に遡るにすぎない。これは尊王主義の現代復活の結果として、他の多くのものと同じく発生した。一九二八年〔昭和三年〕十月には、一七、七九五枚を下らぬ新しい天皇と皇后の写真が全国の学校に配布された。」と、最後の改訂版となる 1939 年刊行の第 6 版（死後出版）に書いている（チェンバレン・高梨健吉訳、『日本事物誌 1』『御眞影拝礼（Bowing to the Emperor's Picture）』の項 p.80）。
- 104 日本の国土面積は日本政府曰く 377,906 平方キロメートルだが、ウィキペディア（Wikipedia）によると実質的には 377,835 平方キロメートルとされる。これはイギリスの国土面積 243,000 平方キロメートル（但し、周囲の Crown Dependencies を含めると 244,820 平方キロメートル）に比べて大きい。森林被覆率 66.5 パーセントと水面積率 0.8 パーセントを差し引くと、123,552 平方キロメートルになる。イギリスの場合、森林被覆率 10 パーセント前後（正確には不明）と水面積率 1.3 パーセントを差し引くと、約 215,541 平方キロメートルである。日本では推定 127,288,419 人（但し、2005 年 10 月 1 日（土）実施の最新国勢調査では 127,756,815 人）の人が住み、イギリスでは日本の半分以上の推定約 60,587,300 人（但し、2001 年 4 月 29 日（日）実施の最新国勢調査では 58,789,194 人）が住んでいる。
- 105 英国人、わけでもスコットランド人は反カトリックの傾向が強い。
- 106 イギリスの候補者は、脈のありそうな特定の階級の住む地域を廻って戸別訪問し、「マニフェスト（manifesto）」（manifest = 在ラズ、菅直人センセイ）と呼ばれる選挙公約の冊子を配り、集会所を借り切って自らの政策の説明会を開き、質疑に応じる。「これぞ民主主義の王道」とイギリス人は考えている。
- 107 Rudyard Kipling (1865-1936) の有名な詩“The Ballad of East and West” (1889) の冒頭 Oh, East is East, and West is West, and never the twain shall meet, (後略) を思い起こさせる。

## 参考資料

- 会田雄次. 『アーロン収容所——西欧ヒューマニズムの限界』(Tokyo: 中央公論社 中公新書, 1962).
- 相原由美子. 「チェンバレンとハーンに見られる日本人観の揺らぎ—往復書簡から—」(昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第 697 号, 1998).
- 相原由美子. 平井法. 『近代文学研究叢書第三十八巻』『バジル・ホール・チェンバレン』(Tokyo: 昭和女子大学近代文学研究室, 1973).
- Amazon 日本法人. <http://www.amazon.co.jp> (アクセス: 2008 年 10 月 1 日).
- 浅羽通明. 『右翼と左翼』(Tokyo: 幻冬舎 幻冬舎新書, 2006).

- Barthes, Roland. *L'Empire des signes*. (Genève et Paris: Editions d'Art Albert Skira S. A. et Flammarion, 1970).
- . Trans. by Richard Howard. *Empire of Signs*. (London: Jonathan Cape, 1983). First published by Hill and Wang 1982.
- ロラン・バルト (Roland Barthes). 宗左近訳.『表徴の帝国』(Tokyo: 新潮社, 1974).
- Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese—Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*. 1st Edn. (London and Tokyo: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd. and 博聞社, 1890).
- チェンバレン (Basil Hall Chamberlain). 高梨健吉訳.『日本事物誌 1』『日本事物誌 2』(Tokyo: 平凡社 東洋文庫, 1969).
- Chamberlain, Basil Hall and W. B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan (including Formosa)*. 9th Edn. (London and Tokyo: John Murray and Kelly & Walsh, Limited, 1913).
- B・H・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain), W・B・メーソン (W. B. Mason). 楠家重敏訳.『チェンバレンの明治旅行案内——横浜・東京編』(Tokyo: 新人物往来社, 1988).
- Dunbar, Edward. “The German executives in the U. S. work and social environment: Exploring role demands” in *International Journal of Intercultural Relations*, 18.
- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1894).
- . Ed. by Francis King. *Writings from Japan*. (London: Penguin, 1984).
- ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn). 池田雅之 (編訳).『新編 日本の面影』(Tokyo: 角川書店 角川ソフィア文庫, 2000).
- 平川祐弘.『破られた友情——ハーンとチェンバレンの日本理解』(Tokyo: 新潮社, 1987).
- コリン・ジョイス (Colin Joyce). 谷岡健彦訳.『「ニッポン社会」入門——英国人記者の抱腹レポート』(Tokyo: NHK 出版 生活人新書, 2006).
- Kaji, Sahoko, Noriko Hama and Jonathan Rice. *The Xenophobe's Guide to The Japanese*. (London: Oval Books, 2002).
- 小泉八雲 (Koizumi Yakumo, a. k. a. Lafcadio Hearn). 平川祐弘 (編訳).『明治日本の面影』(Tokyo: 講談社 講談社学術文庫, 1990).
- タチアーナ・コルチャギナ (Tatyana Korchagina; Татьяна Корчагина).「ロシア人と日本人の交流の変遷——ロシア人から見た日本はどのように変わっていったか——」(昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第709号, 1999).
- 小菅信子.『戦後和解』(Tokyo: 中央公論新社 中公新書, 2005).
- 楠家重敏.『ネズミはまだ生きている——チェンバレンの伝記』(Tokyo: 雄松堂出版, 1986).
- .『イギリス人ジャパノロジストの肖像——サトウ, アストン, チェンバレン』(Tokyo: 日本図書刊行会, 1998).
- Lyne, Colin and Kotaro Sarai. *My Nightmare in England*. (London and Basingstoke: Pan Books, 1996).
- キャスリーン・マクロン (Catherine Macklon). 柳本正人訳.『イギリス人の日本人観——70人のイギリス人とのインタビュー』(Tokyo: 草思社, 1990).
- Miall, Antony and David Milsted. *The Xenophobe's Guide to The English*. (London: Oval Books, 2002). First published by Ravette Publishing 1993.
- A. マイオール (Antony Miall), D. ミルステッド (David Milsted). 玉木亨訳.『イギリス人のまっかなホント』(Tokyo: マクミラン ランゲージハウス, 2000).
- 緑ゆうこ.『イギリス発 日本人が知らないニッポン』(Tokyo: 岩波書店 岩波アクティブ新書, 2004).
- Mikes, George. *The Land of the Rising Yen*. (Harmondsworth: Penguin, 1973). First published by André Deutsch 1970.
- 宮智宗七.『帰国子女——逆カルチュア・ショックの波紋』(Tokyo: 中央公論社 中公新書, 1990).

- 鍋倉健悦 (編). 『異文化間コミュニケーションへの招待』 (Tokyo: 北樹出版, 1998).
- 中山治. 『無節操な日本人』 (Tokyo: 筑摩書房 ちくま新書, 2000).
- 大石俊一. 『犬とイギリス人——一つの国民性論』 (Tokyo: 開文社出版 開文社叢書, 1987).
- 大西守 (編). 『カルチャーショック』 (Tokyo: 同朋舎出版, 1988).
- 太田雄三. 『B・H・チェンバレン——日欧間の往復運動に生きた世界人』 (Tokyo: リプロポート, 1990).
- ハーバート・G・ポンティング (Herbert G. Ponting). 長岡祥三訳. 『英国人写真家の見た明治日本——この世の楽園・日本』 (Tokyo: 講談社 講談社学術文庫, 2005). 底本は『英国特派員の明治紀行』 (Tokyo: 新人物往来社, 1988).
- Rampant Scotland Directory*. [http://www.rampantscotland.com/songs/blsongs\\_rye.htm](http://www.rampantscotland.com/songs/blsongs_rye.htm) (アクセス: 2008年10月1日).
- J. ライス (Jonathan Rice), 嘉治佐保子, 浜矩子. 小林宏明訳. 『日本人のまっかなホント』 (Tokyo: マクミラン ランゲージハウス, 1999).
- Shelley, Rex. *Culture Shock Japan*. (Portland, Oregon: Graphic Arts Center Publishing Company, 1995).
- 鈴木孝夫. 『日本人はなぜ日本を愛せないのか』 (Tokyo: 新潮社 新潮選書, 2005).
- 多賀敏行. 『「エコノミック・アニマル」は褒め言葉だった——誤解と誤訳の近現代史』 (Tokyo: 新潮社 新潮新書, 2004).
- 高尾慶子. 『イギリス人はかなしい——女ひとりワーキングクラスとして英国で暮らす』 (Tokyo: 文藝春秋社 文春文庫, 2001). 初出は『イギリス人はかなしい』 (Tokyo: 展望社, 1998).
- . 『許すか NO か——イギリス・ニッポン 57 年目の和解』 (Tokyo: 展望社, 2003).
- Ward, Colleen, Stephen Bochner and Adrian Furnham. *The Psychology of Culture Shock*. (Hove, East Sussex: Routledge, 2001).
- エンディミオン・ウィルキンソン (Endymion Wilkinson). 徳岡孝夫訳. 『誤解——ヨーロッパ vs. 日本』 (Tokyo: 中央公論社, 1980).
- カレル・ヴァン・ウォルフレン (Karel van Wolferen). 大原進訳. 『なぜ日本人は日本を愛せないのか——この不幸な国の行方』 (Tokyo: 毎日新聞社, 1998).
- Wikipedia*. <http://www.wikipedia.org> (アクセス: 2008年10月1日).
- 横川正夫. 『高下駄とキッチンシューズ——板さんの見たロンドン和食事情』 (Tokyo: 朝日新聞社, 1992).
- 吉田龍恵. 『世界けんか独り旅』 (Tokyo: 新風舎, 2003).

(はらだ としあき 文化創造学科)